
雪華遼遠

ShellieMay

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪華遼遠

【ZPDF】

Z0126Z

【作者名】

Shellicle May

【あらすじ】

去年迄男子校だった聖麟学園に入学してきた神崎操は、男子寮唯一の女生徒。剣道部顧問の嫌がらせで階段から転落、大怪我を負つてしまふ。

その時、運命的な出会いをした鷹栖小次郎との恋。

心身共に傷だらけになりながら、それでもひたすら求め続ける、二人の愛の軌跡。

4月（1）（前書き）

執筆中、思わぬ事から入院騒ぎになりました。

お蔭で、お医者様の様子や病気の事等、少し教えて頂きました。

とはいえ、心療内科的な部分は、医学知識ありませんので、フィクションです。毎度申し訳無いです…。

K病院のH先生、看護師の皆さん、同室だったNさん、Tさんに感謝！！

私の名前は、神崎操。

特技は、剣道。

トレーデマークは、長い髪。

この春、私立聖麟学園に入学した。

本当は、近所の女子校に通うつもりで、受験もして合格したんだけ
ど、入学直前に父の海外赴任が決まった。

因みに、ウチは父子家庭。

母は、私が小学校に上がってすぐ他界した。

夫婦共に1人っ子、然も祖父母も他界しているので、預けられる親
戚も居ない。

困った父は、寮の有る学校を探した。

私の条件は、ただ1つ。

剣道部のある学校。

たまたま学生時代の知り合いが経営する学校に、寮も剣道部もある
というので、父は頼み込んで私を入学させ、自分はあたふたと海外
に飛んで行つた。

数日後、私は慄然とした顔で入学式に参加していた。

周りは…男ばかり…！！

聖麟学園は、昨年迄男子校で、今年からようやく共学になつたとい
う。

しかも、初年度の女子の数は、たつた30人！

女子に人気が無かつたのか、はたまた学校側が入れ渋つたのか…。
頼みの寮も、男子寮だけ。

新入生女子の入寮者は、私一人という、罰ゲーム付き。

困った学校側は、男子寮入口にある、以前寮官さんの住んでいた部屋を私にあてがつた。

一応、シャワーもトイレも付いてるけどね…。

3日前の引っ越し直後から、ノックの音が引っ越し切り無しだ。おまけに『寮官さん』などといづ、有り難いアダナまで拼命してしまつた。

お父さんつたら、一人娘を、なんて所に入れるんだか！

クラスは、女子ばかりが集められ、さながら女子校の様な賑やかさだ。

男ばかりの生活と、女ばかりの生活…両極端だな…そんな事をボーッと考えていた。

「ねえ、あなた、寮に住んでいるんでしょう？」

「えーっ！ そうなの？」

「キヤーー！ 男の中で暮らしてるの？」

「カツコイイ人いる？」

だいたい女子の聞きたい事なんて、そんなもんだよね…余りに大人數を一気に見た私には、全てジャガイモに見える…そう思いつつ、曖昧に笑って受け流す。

なんか、この数日色々有り過ぎて、頭がついて行つてない…。早く、自分を取り戻さなきゃ！

「剣道部に、入部したいんですね！」

その日の放課後、私は剣道場を尋ねた。

何だ何だと部員が集まる中、

「あ、寮官さんだ…。」

という声も聞こえる。

奥から、背の高い男の人が出てきた。

色の白い、少し神經質そつなその人は、にこやかな笑みを浮かべて、「入部希望者ですか？」と、聞いた。

「はい。是非お願ひします！」

「私は、部長の南です。お名前は？」

「1年10組、神崎操です。」

「神崎君ね…少し、打つてみますか？誰か、彼女に合つ竹刀を。」

そう言うと、自らが相手をしてくれた。竹刀を借り、一礼すると、私は思い切り打ち込んだ。

何打か打ち込んだ後、

「君、結構経験がありますね？」と、言つてくれた。

「はい、先日迄道場にも通つていました。」

「賞歴は？」

「賞歴は、ありません。全中剣4位でしたけど…。」

周りが、ザワザワと騒ぐ。

「入賞も、立派な賞歴ですよ。」

「あの…、入部は？」

「私の一存では決められないのでは。顧問の古田先生は、今日は、いらっしゃらないんだ。明日の放課後、防具一式を持っていらっしゃい。立ち合いを見て貰おう。」

「あ、有難うござります。」

私は、明日への希望を持つて、道場を後にした。

翌日の放課後、胴着を着用して、私は道場に向かった。

「神崎操、入ります！」

「やあ、神崎君。来たね。」

南さんが、笑顔で迎えてくれる。

隣には、眉間に皺を寄せた古田先生が座る。

「早速始めましょつか？田丸、お相手しなさい。」

「はい！」

相手の田丸さんは、中肉中背。
これなら…。

防具を付けて、対峙する。

「始め！」

「ヤアー！」

「セイツ！！」

「一本！！！それまで！」

勝負は、10秒で決した。

私の剣は、速攻型。

余り体格も良く無く、体力より気力で戦うタイプだから、勝負を早くつける方が有利なのだ。

おおといづやわめきの中、

「駄目だな。話にならない。」

そう言つたのは、顧問の古田先生だった。

「松田、相手をしろ。」

そう言われて出て来たのは、身長180センチを超える大きな人。

「お願いします！」

「始め！」

「とおおーつ！」

「セイツ！」

長い手と長い竹刀、高い身長。

速攻で打ち込むも、間合いが長すぎる、浅くしか入らない。
力も強く、まともに受けると、腕が痺れる。
マズいな…。

酷く時間が長く感じる。

息が上がる。

息を整え、もう一度飛び込む。

しかし、竹刀のツカで受けられ、弾き飛ばされてしまった。

道場の壁に激突し、しこたま背中を打つ。

「うぐっ！」

「それまで！」

審判をしていた南さんの声が響いた。

「神崎君、大丈夫か？ 防具を解いていいよ。」

と気遣う南さんの声と、

「やはり、女は駄目だな。」

と言い放つ、古田先生の声が重なる。

体躯の差は、遺憾ともし難い。

でも、それに勝る剣技が無かつたのは、事実だつた。

「しかし先生、松田は神崎君から一本取つていませんが。」

「何を言つている、南。あれでは、勝負にもならない。」

「松田の剣に、これ程堪えられる部員が、この中に何人居るとお思いですか？」

落ち着いた口調の南さんにやり込められた先生は、私を睨み付け防具を解いた私に近づいて来た。

そして、いきなり胴着の胸元を持つと、無理やり押し倒し胸元を広げる。

「！ なつ、何するんですつ！？」

「先生つ！！」

下にTシャツを着てゐるとはいゝ、こんな暴挙に出るとは…。この先生、おかしい…。

周りの生徒が、一斉に先生を止めに入つた。

「…先生、許しませんよ。道場でその様な暴挙…。」

南さんの、低い声が響いた。

「こんな事で悲鳴を上げる様なら、男と一緒に稽古など出来るかっ！」

そう言つと、古田先生は道場を出て行つてしまつた。

その後ろ姿を、寝転んだままボーッと見ていた私に、

「大丈夫か？」

と、松田さんが手を貸してくれた。

「ああ…はい…。あの…。」

「済まなかつた、神崎君。驚かしたね。」

「いえ…。」

「古田先生は、かなり男尊女卑的考え方を持つていてね…共学化の話も、最後まで反対していたんだよ。共学となつたからには、部活動もそれなりに進化していかなければならぬんだけどね…。」

「…。」

「神崎君は、インターハイを目指したいんだろう?」

「はい、出来れば参加したいと思っています。」

「なら、部活に所属しないとね。わかつた、もつと上に掛け合つてみよう。」

「ありがとうございます。宜しくお願ひします!」

現在私は、部長の南さんの言葉を信じ、回答を待つている。
その一方、運悪く日本史の担当は古田先生に当たってしまった、何かと嫌がらせを受ける様になってしまった。

昼休み、校内放送で古田先生に呼び出された私は、昼食をかき込み職員室に急いだ。

「失礼します。古田先生、何かご用でしょうか?」

先生は、煙草の煙を私の顔に吹き付けると、机の上のダンボールを顎でしゃクつた。

「コレを教室まで運んどけ。次の授業で使う。」

「…わかりました。」

ダンボールの中には、クラスの人数分の資料集と問題集。

呼び出され、荷物運びをさせられる度に、荷物の量と重さは増えていった。

ダンボールを抱えると、肩が抜けそうな位重い。

「インターハイを目指してるんだ、その位楽勝だよな？」
と、私の姿を見て笑う。

「失礼します。」

歯を食いしばって、廊下を進む。

私達のクラスは4階、これ以上の重さになつたら、肩が抜けてしまう…。

そう思いながら休み休み、よつやく3階迄進んだ所で、午後の授業の予鈴が鳴った。

移動教室の為、階段をバタバタと走る生徒達。
危ないな…と思つた瞬間、ドンッといつ衝撃で私はバランスを崩した。

「あつ…。」

首を後ろに回した時、すぐ後ろを登つて来る長い髪の生徒が視界に入つた。

マズい！女の中だ！と思つた瞬間、私は階段を蹴つて、荷物ごと横の手すりに体を乗り上げた。

そのまま、一階下の踊場に続く階段まで、真つ逆さまに落ちる。

ワーッという誰かの声と激痛。

マズい、目が霞む…。

その時、

「コラーッ、授業始まるぞ！サッサと行け！」

といつ先生の声。

蜘蛛の子を散らす様に、生徒が教室に向かう。

事情を説明しようとした声の主を見上げると、そこには古田先生の顔があつた。

他の先生方は、古田先生が私に対応してくれていると思ったのか、どんどん横を通り過ぎる。

私を見下ろし、ニヤニヤ笑っていた先生は、

「何をしている、神崎。早く集めて、教室に持つて来い！お前の為に、授業に支障をきたしてもいいと思っているのか…この役立たず

がつ！」

「…くつ！」

私は、のろのろと起き上がり、辺りに散らばった本を集める。

「それ、マズいんじゃねーの？ 先生。」

突然、上の階段から2人の生徒が降りて来た。

会話を聞かれた古田先生は、しかめっ面になりながらも、

「お前達、何してる！ サッサと教室に行かんか！」

と、怒鳴る。

しかし、生徒の方は悠々と

「いいの、俺達はエスケープだから。それより今の発言、問題ありだよね？ 階段から落ちた生徒に、その対応ってマズいよねえ？」

「神崎！ すぐ持つて来いよ！」

そう言つと、古田先生は階段を登つて行つた。

「ありがとうございまーす…。」

「派手にぶちまけたなあ。」

そう言つと、体格の良い男子生徒は、本を集めてダンボールに入れてくれた。

「済みません。大丈夫ですから…。」

そう言う私に、隣から

「その状態のどこが大丈夫だつて？」

と、覗き込む顔。

私と一緒に、ポニーテール長い髪。

「あれ？ 女の…子じゃ、なかつ…たんだ…。」

「驚いたぞ。いきなり階段の手すりを背面跳びした時には…。」

「は…い…。」

「この集めた本、どうすんだ？」

「多分、1年10組だ。大和、運んでやつてくれ。」

「ああ。」

「あ…でも。」

「だから、その状態でどうやって運ぶんだよー寮官さん。」

4月（2）

「無理……か……な？」

髪の長い生徒は、再び私の正面から顔を覗き込む。

あ……結構美人……いや、男か……女顔なんだ……なんか、悔しいかも……。

「寮官さん、動くなよ。貧血起こしてるだろ。どつか痛い所ないか
？骨折ってると思うぞ。」

「……腕。」

彼は、私のブレザーを慎重に脱がせ、ブラウスの袖をまくつて顔を
しかめた。

そこに、大和と呼ばれた生徒が戻つて來た。

「どうだ？ 様子は。」

「左腕の複雑骨折は確定だ。後は、素人には判らない。目眩も起
してるからな。心配なのは、脳の方だが……。」

「救急車、呼ぶか？」

「……やめ……て。」

私は、必死で口にした。

気を抜くと、意識が飛びそう……。

でも、此処で騒ぎを起こす訳にいかない。

クラスメートの為にも、自分自身の為にも！

「保健室……行きます……から。」

「残念ながら、今日は閉まつてる。先生は、出張中だ。」

「一応、教室から力バンは持つて來たぞ。」

「……何か……済みません。一つ、お願ひ……いいですか？」

「何だ？」

「手洗い場まで……連れて……行つて……。」

「わかつた。」

「視界が黄色い……頭の中がきな臭い……もう少し……。」

「着いたぞ！」

最後の力を振り絞り、左腕を支えて洗面台に乗せ、上から水を掛け
る。

隣の蛇口も全開で捻ると、其方には頭を突っ込む。

上半身はビタビタだけど、今はそんな事気にしている場合じゃない。
まずは、血圧を上げてしつかりしなきや…。

しばらく水に打たれいたら、後ろからそっと肩を掴まれた。

「気が済んだか？寮官さん。あなたの状態は、そんな事で治る程度
のものじゃ無いと思う。大人しく、俺の言う通りにしてくれないか
？」

そう言つて、蛇口の水を止めた。

凄く気遣つてくれているのが分かる。

全然知らない人達なのに…。

「救急車は嫌なんだろ？今、自家用車呼んだから、もう少しで到着
する。」

そう言つと、カバンから出したタオルで、私を拭いてくれた。
そんな事、自分でするのに…でも、身体中痺れて動かない。
歩く事も出来なくて、昇降口まで運んでもらう。

「しつかりしろ、寮官さん。車が来た。」

「…寮官…さん…な…い。」

「？」

「私…かん…ざ…き…み…さお。」

地底に吸い込まれる様に、私の意識が深く深く墜ちた。

6月（1）

ずっと、名前を呼ばれている気がした。
優しい声…。

お父さん？

帰つて来てくれたの？

でも、多分それは無理…いいんだ…わかってる。

ミサオ…ミサオ…。

甘く優しい囁き…くすぐついたい様な、心地よい響き。
誰？誰なの？

…。

頭が…ボーッとする。

何処だろう、此処は？

瞼が重い…。

視界に、霞が掛かった様に滲んで見える。

ホテルの一室みたいだけど…私の腕に、点滴やコードが繋がれ、頭
の上には機械がある。

規則正しい音…この機械知つてる…病院？

起き上がるうとして、全身に鉛を溶かした様な重さと、身体のあち
こちから起ころる痛みに呻く。

何なの？一体、何があつたの？

入口から誰かが入つて来た気配がする。

白い服の…看護婦さん。

駆け寄つて、手を握つてくれる。

「気付いたか？良かつた…今、医者を呼ぶから。」
あ…男の人だ…。

私の頬に手を当てて…笑つてる？

顔がよく判らない。

ナースコールをしているんだろうか、声が聞こえる…優しい声…貴方は誰？

私は、再び微睡みの中に墮ちた。

私の名前は、神崎操。

私立聖麟学園1年生。

昼休みに、学校の階段から落ちたらしい。

左腕、肋骨2本の骨折、全身打撲、脳震盪…等々で、1ヶ月以上意識が戻らなかつたと説明された時には、流石に驚いた。

病院側は、親と連絡が取れない事に驚いた様だったが、そこは理事長が上手く説明してくれたらしい。

私自身、父がどんな仕事をしているか、よく分からない。

ただ、個人よりも優先される仕事などと、理解する様になつた。母や祖母が亡くなつた時も、父はなかなか帰つて来なかつたから。といつて、父との関係が悪い訳ではない。

週に一度は、必ずメールを送つてくれる。

例えそれが、一方通行のメールであつても。

「神崎さん、調子は如何ですか？」

「大丈夫です。少し頭痛はしますが…身体の痛みも、我慢出来ない程ではありません。」

「…やはり、聞いていた通りだな。」

そう言って、先生はため息をついた。どういふ事？

「あのね、神崎さん。此處は病院なんだから、我慢する必要は無いんだよ。」

「あ…はい。先生、左腕の事なんですが、小指と薬指の感覚が無いんですか…。」

「貴女の場合、左腕は複雑骨折だつたからね。神経もかなり損傷していたんだ。リハビリも始まつたばかりだし、もう少し様子を見ましょう。」

「……神経が、戻らないという事も……あるんですか？」

「……残念ながら。」

「……ですか……。」

「神崎さん？」

「あ……大丈夫です、先生。リハビリ頑張ります。」

「……そうですね。戻ると信じて、頑張っていきましょう。」

身体の血が、急に冷たくなつた気がした。

どんよりと曇つた空。遠くで雷の音がする。
今にも雨が落ちて来そうだ。

屋上のベンチに座り、私は雷の光る遠くの雲を見ていた。

覚悟は、していたつもりだった。

左手の小指と薬指が、利かない……それは、剣道をする者にとっては、致命傷だ。

人差し指と中指は、痺れていた。

しかし、小指と薬指の感覚は、全く無いのだ。

私は……生きる目標を見失つた。

大袈裟かもしれない。

でも、家族とも離れて、寂しさを打ち払う為に、自分自身を強く生きていく為に、私が打ち込んで来た物は、剣道しか無かつた。高見に登る為に、精進だつてしてきたつもりだ。

今更逆手に替えた所で、今以上の強さになるとは思えない。
あと一步、あと一步だったのに……！

とうとう、空から大粒の雨が落ちて來た。

雨脚が早くなり、髪を頬を、雨が伝う。

雨音が、私の声を殺してくれた。

「…神崎！」

突然、背後から呼ぶ声がする。

聖麟学園の制服… 夏服になつたんだ。

その人は、息を弾ませ此方を見ていたが、ゆっくりと近づくと、いきなり私の腕を思い切り掴んだ。

痛い、何？

「お前…。」

と彼の口から出ると、

「あの…。」

と私の口から出るのは、同時だつた。

黙つたのは、彼の方。

私は、再び口を開いた。

「あの…どちら様でしょ？」

瞬間、彼が腕を放した。

何だろう？

この人、私の事を知つていてる？

彼は、下を向いて動かない。

既に豪雨となつた中、彼の長い髪が濡れて、零が滴り落ちる。

「あの…。」

「…濡れると身体に障る。戻るぞ…。」

そう言つと、再び私の腕を取り、半ば強引に引っ張られる。

怒つてる？

何故だろう？

廊下を歩く、びしょ濡れの2人を、人々が振り返つた。

彼は、私を病室まで送り届けると、

「濡れたままでは、風邪をひく。着替えろよ…。」

そう言つて、私を部屋に入れ扉を閉めた。

気遣つてくれたんだ…と思つた瞬間、『ドンッ！』と外から扉を殴る音がした。

何つ！？

遠ざかる足音。

やつぱり怒つてる？

何なの！もうつ！

個室だとシャワーも付いていて、本当に快適。

こんなホテルみたいな部屋、一体一泊幾らするんだろう？

只でさえ、長期入院なのに。

請求書が怖い。それにしても、さつきの人。

明らかに、私に怒つてたと考えるべきだよね？

聖麟学園の制服着てたけど、会つた覚えは無かつた。

とはいえ、あれだけの男子生徒の数、覚えきれたものでは無い。

何故、あんなに怒つっていたのだろう？

何か、失礼な事したのかな？

私は、自分の左手の事も忘れて、あれこれと考えていた。

退院が決まり、寮に戻つた私を、寮生達は暖かく迎えてくれた。

「大変だつたなあ、寮官さん。」

「困つた事があつたら、いつでも言つてくれよ、寮官さん。」

皆そう、気遣つてくれる。

静かな病室と違い、此処には活気が溢れていた。

夕食の時間になつても、全く食欲が湧かない。

とりあえず、トレーにスープとヨーグルトだけを取り、席へ運ぼうとした。

しかし、左手に力が入らず、揺れてスープが零れる。

ああ、こんな事すら出来ないのか…と思つた瞬間、隣からスッピトレーを持つ手が伸びた。

「あ…大丈夫…。」

「大丈夫だと判断したなら、手は貸さない。」

そう言つた人は、先日の屋上で会つた彼だつた。

寮生だつたんだ…。

「席は？」

私は、振りを振った。

その人は、スタスターと窓際の席に自分のトレーと私のトレーを置いて座った。

「…ありがとうございます。」

そういう私を無視して、彼は黙々と食事を始めた。

…氣まずい。

そう思いながら、スープを啜る。

その時、

「お待たせ。」

と言つて、トレーに山の様に食事を乗せた生徒が、彼の隣に座つた。瞬間、席を立とうとした私に、

「立たなくていい。」

と言つ、彼の声。

私は、渋々腰を下ろした。

「寮官さん、それしか食わないのか？俺の、分けてやるうか？」
後から来た人が空氣を破つてくれたので、ホッとする。

「あまり、食欲無くて。」

「ちゃんと食わないと、身体治んねえぞ。」

この人も、私が入院したのを知つてるんだ。

「あの、私…。」

「知つてるよ、寮官さん。神崎操さんだろ？」

気持ち良い程ガツガツと食べながら、その人は言つた。

「俺は、1年7組、赤井大和。宜しくな。」

「宜しくお願ひします。同じ学年なんですか？年上かと思いました。」

「ああ、上だよ。俺達は、特別。留年組だからな。」

そう言つて、豪快に笑つた。

「じゃあ、其方の方も？」

「其方の方つて…お前、名前も名乗らず人助けしてたのか?」「…うるせえ。」

「済まないなあ。」
「…いつ、最近機嫌悪くて…」
「…いつの名前は、鷹栖

小次郎。1年9組だ。」

「…宜しくお願ひします。」

「あ、俺の事は、大和つて呼んでくれて構わない。」

「いえ、それは流石に…じゃあ、大和先輩で。」

「ああ、いいぜ。で、こいつは、何て呼ぶ?」

「じゃあ…小次郎。」

「ぶつ！」

お茶を飲んでいた彼は、目を剥いて吹いた。

「そりやあいい！俺は先輩で、お前は呼び捨て！」

大和先輩の豪快な笑い声が、食堂に響き、つられて私も笑った。

「嘘ですよ。鷹栖先輩。」

クスクスと笑いながら私は言つた。

「…やつと、笑つたな…。」

「え？」

「そうそう、女の子は、笑顔が一番！」

そう言つと、大和先輩は私の頭をわしわしと撫でた。

「何か、お父さんみたい…。」

「おいおい、幾ら何でも、そりゃあ気付くぞー！」

そう言つて、また笑つた。

鷹栖先輩を見ると、静かに此方を見ていたが、私と視線が合つとブイと逸らす。

嫌われてるのかな…。

「私、そろそろ失礼します。」

「おう、そうか？じゃあ、また明日なー。」

「はい、お休みなさい。」

そう言つて立ち上がり、トレーを持とうとする、鷹栖先輩の手がトレーを押さえる。

「いい…これは、俺が持つていいく。」

「でも…。」

「何故、素直に聞けない！」

突然声を荒げられ、食堂の全員に注目されてしまい、いたたまれない。

「小次郎！」

「…済みません。」

そうお辞儀した時、不意に涙が溢れた。

マズい！

そのままバタバタと自室に戻って、鍵を閉めた。

そのままベッドに潜り込む。

何だか、無性に悲しかった。

こここの所、嫌な事ばかりが続く。

最初は、気のせいだと思っていたのだが、誰かが部屋の中に入つて居る様だった。

最近は、わざわざ入つた痕跡を残す様になつて來た。寮長に相談して、鍵を増やしても一向に収まらない。

食欲は益々落ち、夜も寝れない日が続いた。

そんなある日の下校時、寮への道をふらふら帰る私に、いきなり後ろから袋を被せられ、羽交い締めにされた。

そのままズルズルと引きずられて、押し倒される。

相手は…多分2人。

暴れて抵抗する私に、馬乗りになり首を絞める。

もう1人は、足を押さえる。

意識が朦朧とする、息が苦しい…。

ブラウスに手が掛かり、ボタンが一気に引きちぎられた。

もう駄目！そう思った時、ワアワアいう声と共に、私を押さえる力がフツと消えた。

今だ！

私は、顔の袋をかなぐり捨て、周囲も見ずに寮に向かって一目散に走った。

後ろから、誰かが追つて来る気配がした。

慌てて自室に戻り、震える手で鍵を掛け、カーテンを閉める。

程なく、ドンドンと扉を叩く音。

「イヤーーッ！…」

もう、何も聞きたく無い！

しばらく叩かれていたドアは、その内ピタリと静かになった。

6月（2）

あれから何時間、じうじてゐるんだね？
もう、辺りは真っ暗になつていた。

自室の…元寮官室の事務所の床に座り込んでいた私は、のろのろと立ち上がつた。

ブラウスの胸ははたげ、全身泥だらけ。
靴も片方無い。

多分、カバンも外に放りっぱなしだ。

明日の朝、探しに行かなきや。

そう思いながら、服を脱ぎシャワーを浴びる。
あちこち擦りむいたんだろう。

チクチク痛む。

こんな事、何時までも続く事は無い。

大丈夫、明日はきっと良い日になる…。

髪を洗い、身体を洗い、火照った身体に水を浴びていた時、いきなりシャワー室の扉が開いた。

「！」

目をギラつかせた男が、入口を塞ぐ様に立つていた。
何故？鍵は、全て掛かっているはず…！

「お前が悪いんだ！お前が…」

訳の分からぬ事を呟きながら、男は私の腕を掴んだ。

「キヤー——ツ！！」

絹を裂く様な悲鳴。

いきなり男は、私の顔を殴つた。

「何するの！」

「黙れっ！」

何度も拳が顔面を撃つ。

男は、ナイフを出し、

「騒ぐと、これで刺すからな！」

そう言つて、私の髪を掴み、事務所の床に引きずり出し、馬乗りになる。

「イヤーーッ！」

「黙れ！」

また、拳が撃たれ、顔にナイフが当てられる。

私は、咄嗟に左手でナイフの刃を握り締めた。

痺れた手では、ほとんど痛みを感じない。

相手がナイフを抜こうとすると、鮮血が私の胸に滴り花を咲かせた。怯んだ相手がナイフを落とすと、すかさず拾い上げて自分の首筋に当てた。

「あんたに犯られる位なら、自分であの世に逝くわーー！」

「…やれよ。」

そう言つて、男はにじり寄つて来る。

こんな時、女は無力だ。

悔しさに涙が滲んで、私の手に力が入る。

男が、再び馬乗りになつたその時、突然入口のドアが蹴破られ、人影が見えた。

一瞬で状況を把握したのだろう、

「テツメエッ！！」

と飛び込もうとする影を、もう一人の影が止めた。

「俺が行く。お前だと、殺しかねない。」

大和先輩？

大きな影が、男に掴み掛かるのが見えた。

もう一人の影が私を抱き起こし、自分の上着を私に掛け、その上からそつと抱いてくれる。

「済まない、遅くなつた。」

私は、まだ硬直していた。

ナイフは固く握られ、首筋に強く当てられたまま喘いでいた。

私の手ごとナイフを掴み、もう片方の腕を身体に回すと、耳元で優

しく諭してくれる。

「神崎、ナイフを離すんだ… 神崎… 頼むから… 操…。」

その瞬間力が抜けて、私はナイフを落とした。

「鷹栖… 先輩…。」

私は、彼の胸に縋つた。

彼は私の左手にタオルを巻くと、

「大和、済んだか?」

と声を掛ける。

「おう！」

「ドアを閉めて、誰も入れるな。それから、兄貴に電話して、来て貰つてくれ。」

「わかった。」

騒ぎを聞きつけた寮生が、廊下に集まっていた。

バタンとドアが閉まるとき、彼は再び私を抱き締めた。

「もう心配無い、俺が守るから… もう大丈夫だ…。」

「… 大丈夫?…」

身体が硬直して、私が彼を押しやるのは同時だった。

大丈夫… そう、私はもう大丈夫。こんな事、何でも無い。何事も無

かつたんだから。大丈夫、自分の足で立てる。もう平気。ほら、大

丈夫… 大丈夫。

「鷹栖先輩、ありがとうございました。もう大丈夫です。」

「…。」

「私、もう一度シャワー浴びて来ますね。」

「… ああ。此処にいるから、安心しろ。」

シャワーのお湯を出すと、金臭い血の匂いが立ち込めた。

身体や髪に着いた血を、洗い流す。

掌から流れる血を見ながら、綺麗だと思つた。

全部流れたら、楽になれるかしら…。

シャワー室のドアを叩く音に、現実に引き戻された。

「平気が? 神崎。」

「はい。今出ます。」

シャワーから出ると、事務所には大和先輩もいた。
血で汚れた床も、綺麗に掃除されていた。

「大和先輩、ありがとうございました。」「

「災難続きだつたなあ。」

「え？」

「いや、1日に2回も襲われて…。」

「大和！」

「どうして、それを…。」

「気付かなかつたのか？俺達が駆け付けたの？」

「…済みません。逃げ出すのに夢中で…。」

あの時助けてくれたのも、この2人だつたんだ。

「あの後、寮官さんは部屋に閉じ籠もつたままだし。なあ？」

そう振られた彼は、新しいバスタオルを持つて、

「神崎、此處に座れ。」

と、ソファーアを指す。

私が座ると、首に掛けたバスタオルを畳んで背もたれの上に置き、
私の首を安定させると髪を拭きはじめた。

「あ…。」

私が何を言おうとしたか察する様に、

「片手じゃ、拭き辛いだろう。」

と、ぶつきらぼうに言つ。

「お上手ですね。」

「毎日の事だからな。」

「人に髪を拭いて貰うなんて、10年振り…。」

いつの間にか、ドライヤーの風が柔らかくあたり、彼の指が私の髪
を梳ぐ。

ああ、母さんもこいつやつて髪を梳いてくれたつけ…風が心地いい…
涙が目尻から流れる…。

「…母さん…。」

気が付くと、ベッドに寝かされ、枕元に見知った顔があった。

「先生?」

病院でお世話になつた先生が、其処にいた。

「やあ、日が覚めたね。神崎さん。君は、本当によく怪我をするんだね。」

「済みません。でも、どうして此処に?」

「不肖の弟に、呼び出されたんだよ。」

「弟?」

「あれ? 知らなかつたのかい? 鷹栖小次郎は、僕の弟なんだ。」

「...。」

「驚いた?」

「お世話になつてるんです。本当に...助けて頂いてばかりで、申し訳無くて...心苦しくて...。」

「...少し話せる? 神崎さん。」

「はい。」

「理事長に聞いたんだけど、お父さん公務員だよね?」

「はい、海外赴任中です。」

「なかなか帰れ無いって?」

「今回は、最低でも3年は帰れない...。国内にいてもほとんど帰つて来ませんから、同じ様なものです。」

「お母さんは?」

「亡くなりました。小学校1年の時に。」

「じゃあ、親戚に引き取られてたの?」

「小学校3年迄は、祖母が生きていたので。それ以降は、1人で暮らします。」

「自立してるんだね。」

「その様に、母も祖母も、育ててくれました。感謝します。」

「大丈夫っていうのも、そう?」

「…おまじないです。母が教えてくれました…一人で生きて行く為のおまじない…。」

「他人に迷惑を掛けない様に?」

「それも有りますが、何があつても1人で立ち上がる事が出来る為に…。」

「他人を頼るつて、いけない事かな?」

「先生、私馬鹿だつたから、たくさん騙されて来ました。優しくしてくれる人もいたけど、決して永遠じゃ無い…。」

「神崎さん…。」

「放り出されて1人になるなら、最初から1人の方がいい…優しくなんかしないで下さい。辛いだけ…。」

「そんな人間ばかりじゃ無いと思つよ。」

「先生、もう、この話は…。」

「神崎さん、死にたいつて思つた事、無い?」

「そんな…父が悲しみます。」

「医者として言わせて貰つよ。君の今迄の頑張りは評価するけれど、その我慢はもう限界に來てる筈だ。」

「そんな事ありません!」

「毎日色んな物を少しずつ我慢して、毎日色んな物ん少しずつ諦めていってるんだよ、君は。」

「私は、まだまだ大丈夫です!」

「ほら、そうやつて我慢する。我慢つて限界があるつて言つたでしょ?限界を越えると爆発するんだ。つまり、精神が崩壊する。」

「崩壊なんてしない、父を悲しませる様な事、私は絶対にしない!」

「君は、誰の為に生きてるの?お父さんの為?自分自身の為に、ちゃんと生きてる?」

「…お父さん…。」

「自分の血が流れるのを、綺麗だと思った事無い?」そのまま死にた
いつて思つた事あるよね?」

「いやあ…どうして…。」

「爆発させない方法は、有るんだよ。」

「…。」

「それは、君が君自身を許してやる事だ。差し伸べられた手を握るものも、1人ではなく2人で立ち上がる事も、悪い事では無いんだよ。」

「…。」

「我慢ではなく、想いを溶かしてやる事だ…。」

「…怖い。」

「人は本来、支え支えられて生きるものだ。1人では、支えきれないと…。」

「私の今迄してきた事、全て間違いだと？」

「神崎さん？」

「私の全てを否定すると…？」

「マズい！小次郎！！彼女を抱き締めて離すな、呼び続ける！」

慌てて部屋に入つて来た鷹栖先輩が、私を抱き締めて呼びかける。

「落ち着け、神崎！平氣だから…。」

「今迄の私は一体、何だったというの…？」

「落ち着いてくれ…頼むから…神崎…。」

「私は！私…」

「…操…操…」

「…。」

「ミサオ…。」

私は、彼の腕の中で墮ちた。

「兄貴、今のは？」

「どうやら大丈夫そうだ。分裂仕掛けたんだ。寸での所で収まつたがな。」

「…。」

「話は、聞いてたな？」

「ああ。」

「一時的な感情じゃ、彼女を崩壊させちまつ。分かるよな？」

「ああ。」

「俺は薦められない。彼女の為にも、そつとしておいてやる道もある。」

「分かつてゐる。」

「…もう一つ、彼女の親父さんの事だ。」

「？」

「我が国では珍しく、かなり危険な仕事をしてゐる様だ。」

「！」

「父親の死は、彼女の崩壊を招く恐れがある。」

「…そうか。」

「馬鹿な弟は、腹を括つてゐる訳だ。」

「…。」

「焦りは禁物だ。ひたすら寄り添つて、彼女から手を差し出させなきゃならん。」

「分かつてゐる。」

「何があつても『大丈夫』だけは使うなよ。彼女にとつては、悪魔の呪文だ。」

「ああ。」

「まあ、キー・ポイントが分かつただけでも、今日は良しとするかあ！」

「何だよ、それ。」

「彼女にとつての、とつておきつて奴！」

「だから、何だよ兄貴！－！」

「ははは…お兄様と呼べ！」

翌日、徹底的な調査の結果、事務所の床にある備蓄庫の扉から床下を通つて侵入された経路が発見された。

其処から侵入しては、寮生の私物を盗んでいた警備員が犯人だった。即日、侵入路は塞がれ平穩な日々が訪れる。

残つたのは、根も葉も無い、噂話だけだった。

強姦未遂事件から2ヶ月、夏休み真っ只中。色々な憶測と噂をはらみ、一時は騒然としていた学内も、ようやく落ち着いてきた。

私は今、図書室にいる。

夏休みも生徒の為に開放されており、図書委員は貸し出し業務の為に交代で出て来る事になっていたが、皆予定が有る様で、必然的に暇な私にお鉢が回つて来る。

「操ちゃん、お茶にしません？」

準備室から、珠ちゃんが声を掛ける。

彼女は、楠田珠恵。私のクラスのもう一人の図書委員で、私の心許せる友。

「このカード、片付けてからでいい？」

「宜しくてよ。」

そう言って、私の隣に座つた。

殆ど人の居ない図書室の一隅で、机に突つ伏して昼寝しているポーラー

「見れば見る程、美形ですわね。小次郎様は。」

「そうね。でも見慣れちゃつたわ。」

「贅沢ですよ、操ちゃんは！仲が宜しいのでしょうか？」

「まあ、お世話にはなってるわね……でもうよ、あの人。」

「其処が宜しいのよ！耽美だわ！」

因みに珠ちゃんは、801ちゃんだ。

学校内の情報通であり、パソコン通もある。

「下手に手出すと、噛み付かれるわよ。」

「いいの、私の脳内妄想は、誰にも止められないのよ。」

「はいはい。でもね、イメージ崩して悪いけど、お説教が始まると長いのよ。まるで、口喧しきお母さんみたいで……。」

「…聞こえてるやー！」

「オマケに地獄耳。」

珠ちゃんは、口々口々笑いながら、

「先輩も、お茶にしませんか？」

「ああ。」

と、のそのそ起きて来る。

あの事件以来、先輩達との距離は、かなり近付いた。

朝晩の食事も3人で食べる様になつたし、登下校も一緒に事が多い。私の部屋にもよく顔を出してくれて、勉強も見てくれる様になつた。

「今日は、ケーキもありますのよ。」

「あら、贅沢。」

「だつて、明日から図書室も閉まりますでしょ？ しばらくは、お別れですし。」

「明日から、旅行だつけ？」

「ええ、カナダに行つてきますわ。お土産、何が宜しいかしら？」

「熊！」

「オーロラ！」

「全く貴方達は…締めますわよ。」

「美味しいな、このケーキ…。」

先輩は、案外甘党である。

「新しく開拓した店ですよ。とにかく操作ちゃん、明日からどうなさるの？」

「何が？」

「閉まつてしましますでしょ？ 寝も。」

「何、それ？」

「確かに、明日から29日まで、寮も学校も、完全閉鎖ですわよ。」

「…嘘。」

「お前、知らなかつたのか？」

「知りませんよ！そんな連絡ありました？」

「かなり前だ…もしかしたら、入院中か？」

「…珠ちゃん、パソコン借りていい？」

「ええ、どうぞ。」

これは、私にとつて死活問題だ。

私は、ネットで住み込みのバイトを検索するが、半月間などという中途半端な期間の採用など有るはずも無かつた。

近くのビジネスホテルも、明日からのお盆休みで軒並み満室。しょうがない、残る手立ては…。

少し陽の傾いた道を、先輩と一緒に帰る。

「大和先輩、今頃どの辺りでしょうね…。」

「ああ。そうだな。」

大和先輩は、武者修行と称して、夏休みが入つてすぐに旅立つて行った。

「先輩は、どうされるんです？明日から…。」

「俺は、北海道へ行く。」

「いいなあ、お土産期待します。」

「…何がいい？」

「キタキツネ。」

「…噛むんだぞ。」

「そうなんですか？」

「昔、噛まれた。」

「意地悪したんでしょう？」

「していない。」

「したんですよ、きっと…。」

「してないって。」

「フフフ…。」

「お前は、どうするんだ?」

「大丈夫ですよ。」

「…また、そう言つ…。」

「心配しないで下さい。当てはあるんです。」

「本当に?」

「心配性だなあ、先輩は…。ハゲますよ?」

「うるせえ。」

翌日、寮に残つた数名の生徒が退出するのを確認し、施錠をしてから私は荷物を担いで校門に向かつた。

校門前に止まつていた黒いセダンのドアが開き、先輩が車から降りる。

「あれ?まだ行かれて無かつたんですか?」

「乗れ。」

今日は、ちょっと機嫌悪そう。

こんな時は、言つ事を聞いておかないと、後のお説教が長い。
私は、後部座席に乗り込んだ。

「何処まで行く?」

「あ…じゃあ、駅前までお願いします。」

運転手さんにお願いして、私はシートに身を沈めて、先輩を盗み見る。

今日は、何怒つてるんだろう?

駅前まで送つてもらい、車を降りる。

「先輩も、気を付けて行つて来て下さいね。」

「…。」

最後まで、口を聞いてくれないまま、車は駅のロータリーを走り去つた。
変なの。

さあ、気を取り直して出発！

私は、今日から職探しもしなきゃいけないから、忙しいのだ。
まずは、宿泊先の確保だ。

目指すは、駅の路地を抜けた所にある…インターネットカフェ。

「ここだわ…。」

少しボロいビルの2階に、そのインターネットカフェはあった。
荷物を担ぎ直して、2階に上がる階段に手を掛けた途端、

「神崎…！」

聞き覚えのある怒鳴り声。

思わず首をすくめて振り返ると、先輩の鬼の様な顔。
つかつかと近付くと、また腕を掴まれる。

「お前の当てというのは、コレか！？」

「いけませんか？」

「此処で、どうするつもりだつたんだ？」

「泊まるんです。で、仕事探すの。忙しいんで、行きますよ。」

「こんな所、女子高生の泊まる所じゃない！」

「偏見ですよ。シャワーもロッカーも完備されてるし、ホテルより
ずっと安い。庶民の味方です。」

「…許さない。」

「先輩に許して貰う必要ありません！」

「車に乗れ！」

「嫌よ！」

「いいから、乗れ…！」

そう言いつと、いつの間にか側に来ていたセダンのトランクに、私の
荷物を引っ張り入れてしまった。

そして、再び私の腕を掴んで後部座席に押し込み、自分も乗り込ん
だ。

「先輩なんか、大っ嫌い！」

私の意志なんて、頭から全く無視なんだから！

私は、先輩に背を向けて車窓の景色を見ていた。

「…神崎。」

「知りません！」

「神崎…。」

「知らないつ！」

腕を引かれ、正面に向かされると、優しく抱きすくめられる。するい。

先輩は2人きりの時、時々「ひやつて私を黙らせる。

「何処行くんですか？」

「北海道。」

「チケット、取れませんよ。」

「もう、取つてある。」

「何でえ！？」

「楠田が、連絡して來た。」

珠ちゃんめ！裏切り者。

「あんな所に泊まらせるなら、北海道でキタキツネと野宿させる方がマシだ。」

やつぱり先輩つてうです。

突然耳元で

「…たまには、髪を下ろせ…。」

と囁いて、私の頭のゴムをシユルシユルと外し、下ろした髪に顔を埋めた。

あ…駄目…ゾクツと来た。

逃れる様に先輩の胸に顔を埋めると、優しく髪を撫でてくれる。心地良い…ここにずっとこうしていたい…そう思つた瞬間、急に怖くなつて震えが来た。

「…神崎？」

急に身体を固くする私を離し、落ち着く返手を握ってくれる。

私は…先輩の想いを薄々気付いている。

最初は、嫌われていると思つていたけれど、今分、きっと…。

最近少ししずつではあるけれど、私自身も、やつと同じ気持ちになりつつあるんだと思う。

でも、気持ちの半分は、怖くて仕方が無い。

そして、その反応は直ぐに身体に表れてしまう。

他の事に関しては強引な先輩が、この件に関しては絶対無理強いしないのを私は知っている。時折自分にいたたまれず、ジレンマを起こしてしまつ。

どうして、何故、どうすればいいの…？

「「めんなさい。」

「いや、いいんだ。」

「先輩、強引に連れて行くんだから、私のお願ひ聞いてくれます？」

「何だ？」

「数学と物理の宿題、教えて下さる？」

「わかった。」

千歳空港にも、迎えの車が来ていた。

「北海道は、初めてか？」

頷く私に、先輩は、

「何か、見たい物はあるか？」

と聞いた。

「キタキツネ。」

「食べたい物は？」

「トウモロコシ。」

「お前は、何処までもお手軽な奴だな。」

「先輩、それすつじい失礼ですよ！」

「…怒ったか？」

「知りません！」

また、抱き寄せようとする先輩を側して、運転手さんに話しかける

「見れますか？キタキツネ。」

「この時期、チョロチョロしますよ。」

「見たいなあ。」

「お嬢様は、ご学友なんですか？」

「止めて下さい、お嬢様なんて。私は、ただの……。」

「嫁だ。」

「！」

「何言つてるんです！先輩！」

先輩は、知らん顔して外を見ている。

「冗談ですかうね！私は、ただの後輩です。」

「…はあ。」

「もう、勘弁して下さいよ！」

ムキになる私が可笑しいらしく、先輩はずつとクスクス笑っていた。

富良野にある別荘に着いた途端、中から元気な声と共にショートカットの女の子が出て来た。

「小次郎っ！」

そう言ってハグする女の子に、先輩は明らかに動搖していた。

「今日来るつて聞いてたから、待つてたのよ！もつと早く着くかと思つてたのに！」

「どうして…。」

「急いで！皆待つてる！あつ、其処の貴女、荷物運んで。」

「あ、私？」

そう聞く間もなく、女の子と先輩は別荘の中に消えた。

「他にもお客様が、いらっしゃったんですね。」

「はい…何時も小次郎坊ちゃん一人なんですが、今年は喜久子様のご家族が急にいらっしゃって…。」

「私、お邪魔じや無かつたのかなあ？あ、今の女の子は？」

「喜久子様の長女の楓様です。」

「因みに他には？」

「喜久子様にご主人の竹島篤郎様、ご長男の聰様、ご次男の優様です。」

「あらま、沢山。」

「それで、あの…少し問題がありまして…。」

「何でしょう？」

「とりあえず、中に…。」

そう言つて、運転手さんは荷物を持つて、裏口に回つた。

「家内のマキです。申し遅れました。私は、都賀欣一と申します。」

「あ、神崎操です。宜しくお願ひ致します。」

「実は、お部屋が足りないので。」

「あらま、沢山のお客様ですものねえ。」

「それで、大変失礼なんですが、しばらくの間使用人の部屋を使って頂きたいのですが…。」

「泊まる場所があれば、何処でも構いませんよ。先輩は、キタキツネと野宿させるつもりだったんだから。」

「15日には、喜久子様御一家はお帰りになる予定ですので、その間だけ…。」

「構いません…っていうか、沢山のお客様で、人手足りなくないですか？」

「はい、それは…。」

「私、アルバイトさせて下さい…。」

8月（2）

リビングにマキさんと一緒にお茶を運ぶ私を見て、機嫌が悪そうな先輩の顔の眉間に、深いシワが寄つた。

ついと立ち上がり、部屋を出ようとすると。

「小次郎、どこに行くの？」

喜久子様が声を掛ける。

出来る女って、こんな感じかな？セシールカットのスレンダーな人。若い頃は、凄い美人だったに違いない。少し、先輩に似てる……。

「疲れたので、休ませて頂きます。後で、部屋に茶を頼む。」

「承知致しました。」

竹島家の面々にお茶を配る。

「小次郎君は、相変わらずだね。」

「あのままで、良いわけありませんよ。」

「思春期特有の反抗期ですよ、お母様。学校を出て、社会にでれば嫌でも気付く。自分の愚かさにね。」

「私は、今ままの小次郎が好きよ。」

皆で、先輩の話し何だろう？

「ちょっと、そこ責め女！」

「はい、私ですか？」

「名前は？」

「神崎操です。」

「操さんね？小次郎に、お茶を運ぶのでしょ？起きていたら、降りて来る様に言いなさい。」

「はい。」

「それから、時間があつたら優の面倒を見てちょうだい。」

「はい、承知致しました。優様、後で一緒にしますね。」

優様は、につこり笑つた。

「失礼します。お茶、お持ひしました。」

「入れ。」

2階の先輩の部屋は、明るくていい風が入る。

「気持ち良いですね。さすがに北海道つて感じかな?」

「何してる?」

「え?お茶を運んで……。」

「じゃなくて!」

「怒ります?マキさん達の手が足りないみたいだったから、喜久子様達がいる間、アルバイトしようつかと……。」

「夜には、此処を出るんやー!」

「駄目ですよ。」

「何故?」

「喜久子様達、先輩に何かご用があるんじゃありませんか?」

「聞かなくても、分かつてん……。」

「お家の事だから、何も聞きませんが、ちゃんと話した方がいいです。わざわざいらしたのも、その為でしょ?」

先輩は、私を抱き寄せて言つた。

「お前にこんな事させて、聞く意味なんて……。」

私は、先輩の背中をさすつた。

「私達も、話さないと、理解し合えない事、たくさんありましたよね?一杯話して、自分を理解して貰つたら良いじゃありませんか?」

「……操。」

「喜久子様がお待ちですよ。」

「……わかった。」

私は、部屋を退出した。

階段を下りた所で、優様が私を待ち構えていた。

「私を、待つて下さってたんですか?」

「うん。時間、空いた？」

「じゃあ、マキさんに聞いてみますね。」

私はマキさんに確認し、優様の相手をする事にした。

「で、優様は、何をしたいのかな？」

「えっとねえ…探検！」

「了解しました、隊長！それでは、探検グッズを揃えるあります！」

リコックに色々詰め込んで、帽子を被り、私達は小さな小さな探検に出かけた。

虫を捕まえ、木の実のお宝を発見し、花の王冠を作り、秘密基地まで作った。別荘に帰つて風呂に入れ、髪を乾かしてやると、優様は私の膝で昼寝を始めた。

「すっかり、懐かれた様だな。」

「可愛いですね…。先輩も子供の頃は、こんな感じでした？」

「いや…俺は…。」

「お嫌いですか？子供の頃の話は。」「ああ。」「ああ。」

「そうですか…私も、好きではありません。」

「そうなのか？今日の様子を聞くと、幸せな子供時代を送った様に思えたが。」

「あれは…夢です。子供の頃、こうやって遊びたかった夢。今日は、優様とそれを実現出来ました。楽しかったあ…。」「…そうか。」「…そうか。」

「先輩、優様ベッドに運んでもらいます？私そろそろ、夕食の準備に行きますので。」

「わかった。」先輩は優様をベッドに運び、布団を掛けてくれた。

「それじゃ、私は…。」

「待て。」

「何ですか？」

「少しだけ、此処に居る。」

そう言って、抱きすくめられる。

「同じ屋根の下に居るのに、お前と居る時間が無い……。」

「甘えん坊の子供みたいな事を。」

「ぬかせ！」

「はいはい。」

「優の奴、お前に膝枕されてた。」

「？」

「俺も、してもらつた事、無い……。」

「だつて、そんな仲じや……。」

腕に力が入る。

「……駄目……行かないと。」

私は、腕を逃れて厨房へ走った。

「君と小次郎つて、どういう関係なんだい？」

就寝前のハーブティーをのみながら、聰様が尋ねる。

「別に……。」

「小次郎が、君の姿をずっと田で追つてる。」

「危なつかしいからじゃ無いですか？」

「時々コソコソ話してるよね。」

「……奉公先の坊ちゃますから。」

「ふーん。」

カツブを置いて近づいて来た聰様は、私の顎を持ち上げ片手で腰を密着させる。

「僕は、あまり興味無いけど……小次郎が君に興味を持つのは分かる気がするな。」

「どういう事？」

「人を呼びますよ。」

「ゴムを取られ、髪を搔き揚げられる。」

「いいよ。小次郎が見たら、どう思うかな？」

この人、大嫌い！

「恥ずかしくないの！」

「別に。細い首筋だ…。」

そう言って、舌を這わす。

嫌だ！

何か手近な物…。

机の上を、後ろ手に探つて見つけたペーパーナイフを構える。

「それで、僕を刺すのかい？」

「そんな事しないわ！」

私は、自分の首筋にナイフを当てる。

「どうせ、見かけ倒しだろ？」

ナイフに、思い切り力を込めると、よつやく刃先が皮膚に刺さり、血が流れる。

「おいおい、冗談だろ？」

「試してみる？」

刺さった刃先を移動させると、新しい血が吹き出す。

「何て奴だ！」

そう言って、聰様は部屋から出て行つた。

助かつた…。

振り向くと、鏡に自分の姿が映つっていた。

流れ出た血が、首筋を通つて胸元に薔薇の様な大きな染みをこじらえていた。

それを、綺麗と思つてしまふ自分に愕然とする。

まだ私は、死にたいと思つてゐるの？

先輩に、あんなに想われも、まだ…。

悲しくて悲しくて、肩を抱いて泣いた。

翌朝、マキさんが、聰様の部屋から私の使う部屋まで血痕が続いているのに驚き、先輩に報告したらしい。

先輩が私の部屋のドアを破つた時、私の意識は朦朧としていた。

自分で止血したつもりだったが、思つていたより傷が深かつた様だ。病院から帰つた私は、有無を言わせず先輩の部屋に運ばれ、ベッドに寝かされマキさんに付き添われていた。

聰様は、今朝早くに東京に帰つたらしい。

先輩は、喜久子様達と話しているという。

ベッドでトロトロとまどろんでいた私は、いきなり布団を剥がされた。

「貴女！ 一体何なの？」

楓様が、真つ赤な顔をして立つていた。

「何で、小次郎のベッドなんかに寝てるの！ 降りなさいよ！」

と、引きずり降ろされる。

「何で、小次郎の婚約者の私が出て行かなくちゃいけないの？ 貴女が出て行けばいいじゃない！」

「！！」

「小次郎は、私のものよ！ 泥棒猫みたいな真似しないで！ この部屋からも、この別荘からも、消えてちょうだい！」

心に針が刺さつた。

細く鋭い針が、深く、深く…。

私はノロノロと立ち上がり、自分の部屋に向かつた。

マキさんは、オロオロしながら成り行きを見守つている。荷物を纏めていると、ノックの音がする。

「いいかしら？」

喜久子様の声。

私は、ドアを開け招き入れた。

「凄いわね…。」

部屋は、昨夜の状態のまま、血だまりが出来ていた。

「タベは、聰が失礼な事をしたみたいで、ごめんなさいね。」「ぐあ…。」

「貴女、声が…。」

「…。」

出ない。傷のせい？

「私達、今日此処を立つけれど、貴女も此処に居ない方がいいんじやないかと思つてね。」

「…。」

「私達と、東京に戻つたら如何かしら？」

私は、頷く。

「良かつた。じゃあ、戻る準備をしたら、リビングに来てちょうだい。」

そう言つて、喜久子様は出て行つた。

荷物を纏めて玄関に置き、リビングに向かう。

私の姿を見て、先輩は驚いた様に

「寝てなくていいのか？」

と言つた。

「小次郎、彼女は私達と一緒に東京帰るのよ。」

「！？」

「貴方が此処に居るのは、構わない。でも、彼女には帰つて貰います。」

「…何処に帰るつて？」

「彼女は、責任を持つて親御さんの所に届けるわ。」

「神崎！…答える！…」

「…。」

私は、目を伏せたままだ。

「彼女は、今、声が出ないのよ。」

「…じゃあ代わりに僕が答えましょ。彼女は今、帰る場所が無いんだ。」

先輩がやつて来て、私の腕を引いた。

「お前、何処に帰るつていうんだ？ 寝も閉まつたままだろ？ が！」

大丈夫と、口真似をする。

「どういう事？」

「彼女は、寮しか住む場所が無いんです。」

「なんだ、宿無しの、捨て猫なんだ。」

「楓、失礼な事言つんじゃありません！」

「彼女の父親は海外勤務で、その間、寮生活をしていくだけです。」

「そう…では、ウチに来る？」

「冗談じや無い…あんな事をした、聰の居る家に、行かすわけにはいかない！絶対にだ！！」

そして、私に向き直つて言つた。

「神崎、お前の居る場所は、此処しかないだろ？…あんな事され
て、声まで出なくなつて、俺がお前を放り出せる訳ないだろ？…
私は、精一杯の抵抗で被りを振り、突き放そつとした。しかし先輩
は、これまでに無い程しつかりと抱き締めると、

「此処に居ろ、操。俺の所に居るんだ。俺が守るから。ずっと守る
から…操…。」

涙が溢れるのと同時に、目の前が真っ暗になつて、膝から崩れ落ち
た。

…ミサオ…ミサオ…。

優しい囁き。

そよ風の様に、私の髪を梳く指。

私の一番好きな場所…チリチリと胸の奥が疼く。

「操？」

「！」

慌てて起きよつとした私は、目眩に襲われる。

「無理するな、まだ貧血気味なんだろう？」

だって、それは、先輩が添い寝なんてしてゐから…。
少しづつ後ろにずれようとする私を、先輩は、また引き戻す。
こんな所、また楓様に見つかつたりしたら…！

「うう…。」

クルリと反転し、ベッドの下にうずくまる。

「皆んな、東京に帰った。安心しない。」

耳を押されて、被りを振る。

胸の針が痛い。

「操?」「

差し伸べられた手を、思い切りはねのける。

触れられる事を、身体が拒否してる。

あんなに好きだった、先輩の腕の中に、もう戻れないの?

私は、声にならない声を上げて泣いた。

あれから、何となくギクシャクとした口が続く。

相変わらず、私の声は出ず、医者からも焦らない様にと言われた。先輩との距離は、離れる事を許されず、触れ合つギリギリの所でキープされていた。

数学の宿題を解いている私に、テーブルの対面の先輩が話し掛ける。

「神崎、祭りは好きか？」

私は、顔を上げて頷く。

「夕方、近所の神社であるそうだ。行くか？」

頷く私。

「トウモロコシ、あるべ。」

やつたあ！

「嬉しそうな顔しやがって…マキに言つておくから、浴衣着て待つててくれ。」

待つ？

「俺は、少し用事があるから、出掛け来る。夕方には戻るから、数学ちゃんとやつとけよ。」

と笑う。

先輩の笑顔、久し振りだ。

私も、笑つて頷いた。

先輩が出掛けると、私は猛スピードで数学の宿題を終わらせ、シャワーを浴びて浴衣に着替えた。

誰の浴衣かな？

楓様のじや無さそつ。

少しクラシカルな浴衣に合つ様、髪をアップにして簪で止めた。

少し、早かったかな？

リビングにある窓際のソファーに座り、外を眺める。開け放たれた窓から、緩やかな風が入り、ウインドチャイムが心地良い音を奏でた。

気持ちいい…私はまどろみの中に沈んで行つた。

頬を撫でる手に、私は覚醒した。

全く知らない中年の男性が、私の頬を撫でていた。

凍りつく恐怖。

私は被りを振つて、後座すつた。

「君は…。」

尚も男は、手を差し伸べて迫つて来る。

怖い！どうしよう！

私は、そのままリビングのテラスまで逃げた。

「君は…君は…。」

迫つて来る恐怖に、私は髪から簪を抜いて、喉元に当てる。嫌だ、嫌だ、またこんな思い…。

テラスの手すりまで追い詰められ、簪を持つ手に力が入る。

「ミサオ！！

テラスの下から先輩が叫ぶ。

「先輩！！」

私は、手すりを乗り越えて、先輩の胸にダイブした。

「操、お前声が…。」

私は、先輩の胸の中で、声を上げて泣いた。

「落ち着いたか？神崎。」

「…はい。」

あれから、先輩の部屋に連れて行かれ、落ち着くまで付き添わっていた。

あれ程先輩の胸に縋つて泣いたのに、しばらくするとまた身体を硬直させてしまう。

「『めんなさい。何か私、凄く自分勝手…。』

「無意識じゃ、仕方無いだろ？ 気にするな。気長に待つって決めたんだ。」

「…待つても、駄目かもしれない…。」

「いや、待つ…。」

「でも…。」

「これは、俺の問題だ。口出しするな。」

「…。」

先輩は、躊躇しながら私の顎を持ち上げる。ビクッと緊張する私の喉を、そつと触れる。

「良かった。少し跡が残ってるが、傷にはなっていない様だな。」

「済みません。」

「お前が謝る必要ない。」

「…。」

「それにしても、今年の夏は、千客万来だな。」

「どういう事ですか？」

「兄貴だけじゃなく、親父まで別荘に来やがった。」

「えっ？ さっきの、お父様だったんですね！？」

「驚かして済まなかつた。多分、お袋の浴衣を着ていたんで、向こうも驚いたんだろう。」

「お母様のだつたんですか。すぐに脱ぎますね。」

「いや、着ておいてやつてくれ。」

「良いんですか？」

「ああ。落ち着いたら、下に行こ。」

「はい。」

リビングに戻ると、2人の男性が談笑していた。

「やあ、久し振りだね。神崎さん。」

「ご無沙汰しています、先生。」

「紹介するね、僕達の父親だ。あの病院で、院長をしている。此方、

神崎操さん。」

「神崎です。お邪魔させて頂いております。」

「さつきは驚かして、本当に悪かったね。それに聰が、とんでもない事をした様で、本当に申し訳無い。」

「いえ…私が勝手に奥様の浴衣を着てしまつたから…此方こそ、申し訳ありませんでした。」

「神崎、お前が謝る必要無いと言つたら…!」

「でも…。」

「神崎さん、私の誤解を、解かして貰えるだろうか?」

「え?」

「ちょっと、着いて来てくれるかね?」

「はい。」

「親父、それは…」

そう言う先輩を、先生が抑える。

なんだろ?つ?

私は、院長先生と2人で2階の一一番奥の部屋に向かつた。
確かに此処は、喜久子様達が来た時も、使われ無かつた部屋。
院長先生が扉を開けると、優しい色調の壁紙に大きな窓。
茜色に染まる窓の外の景色が、まるで一枚の絵の様だ。

ベッドにクローゼットにドレッサー。此処は、女性の部屋だ。

「此処は、妻の部屋だつたんだ。」

「素敵なお部屋ですね…。」

「妻を、紹介させてくれるかい?」

「え?」

確かに、先輩のお母様は、幼い時に亡くなつたと聞いていた。

院長先生は、壁にあるカーテンの所に行くと、

「妻の薰だ。」

そう言つて、カーテンを開ける。

「！」

其処には、私がいた。いや、私じゃない。私には、あんな笑顔出来ない。

白いドレス…ウエーティングドレスだらつか?…身を包んだ彼女は、両手を広げ包容を待つ様に笑い掛ける。

彼女の周りには花が舞い、幸せの絶頂にある。

100号のキャンバスに描かれた絵は、観る者を幸せな心地にしてくれるのだろう…私以外の人を…。

「君を見た時は、正直驚いた。薫が生きて戻つて來たと、本氣でそんな事を思つてしまつた。お盆だからだろうね…。」

「…。」

「小次郎が、君に心を寄せるのも、分かる気がする…薫が死んだ時、あれはまだ5歳だった。」

「…。」

「母親の事は?」

「…幼い時に、亡くなつたとだけ…。」

「そうか…薫は、小次郎の身代わりに亡くなつたんだ。」

「…!」

「此処に遊びにきていてね。川遊びしていた小次郎が、溺れたのを助け様として亡くなつたんだ。」

「…!」

「以来、小次郎は、夏には必ず此処にやつて来る。」

「そりだつたんですか…。」

「その別荘に君を呼んだという事は、君は小次郎にとつて其れだけの存在という事なんだろうね?」

「いえ…先輩は、寮が閉鎖されて行き場が無い私を助けてくれただけです。」

「そりなのかい?」

「……はい。」

私は、小さく答えた。

「一つ君にお願いがあるんだが、聞いて貰えるだらうか？」

「何でしょう？」

「私は、妻を心から愛していた。だから、妻が亡くなつた時、人目もはばからず悲しんだ。」

「お気持ち、わかります。」

父も、母が亡くなつた時、人目もはばからず泣いていた。
「幼い小次郎は、その姿を見て思つたのだろう……母親を殺したのは、自分だと。」

「そんな……。」

「あの子は、苛まれている。次第に私と距離を置く様になり、中学校から寮のある学校に入つて、家を出てしまつた。」

「…。」

「私は、小次郎と普通の親子関係を取り戻したい。そして、出来るなら家に戻つて貰いたいんだ。」

「…。」

「君に、手を貸して貰いたい。」

先輩が、家に帰る手助け……。

私は、目を伏せた。

「……私の言つ事を、聞いてくれるかどうか……。」

「君じやなきや成し得ないと、私は思つてゐる。」

「……わかりました。」

「……私は、君に……酷なお願いをしているのだろうね?」

私は、被りを振る。

「私は、大丈夫です。今までだつて、独りでやつて来ましたから。」

「君を抱き締めても、いいだらうか?」

「……奥様は、院長先生の事を、何と呼ばれていたんですか?」

「……あなた……と。」

私は、髪から簪を取り、帯に挟んだ。

そして、両手を広げ、今自分が出来る一番の微笑みを向けて言った。

「あなた…。」

「薰！」

院長先生が、私を抱き締める。

どれだけ奥様を、深く愛していたかが分かる。
その想いが、ストレートに流れ込む。

「…あなた…。」

「…薰…薰…。」

やがて、その抱き方に変化が現れ、私の髪を優しく撫でる。

「…君は、優しい子だね…。」

「私は…先輩と離れた方が良いのでしょうか?」

「それは、私にはわからない。君と、小次郎の問題だよ。」

「私は、先輩に心配を掛けて、負担を掛けて、与えられてばかり…
どうお返しすればいいか、わからない…。」

「君は、そんな所まで薰に似ているんだね。そして、小次郎も…。」

「…。」

「それが、小次郎の愛し方なんだらう。君は、愛情で応えればいい
んだよ。」

「…今の私には、それすら出来ないんです。」

院長先生は、ずっと私の髪を撫でてくれた。

院長先生と別れて、私は自分の部屋に戻った。

食事も喉を通りそうに無かつたので、辞退させて貰った。

大丈夫、明日には普通に笑顔で過ごせる。きっと大丈夫。

その時、ノックの音がした。

どうしよう、先輩には今会いたく無い…。

「起きてる? 神崎さん。僕だけど…。」

先生の声。

私は、ドアを開ける。

「ちょっといい? ロコア持つて来たんだけど。」

「どうぞ。」

先生を招き入れ、小机の椅子を勧める。

「食欲無いつて？ココアなら飲める？」

私は頷き、カップを受け取る。

温かくて甘くて、優しい味。

先生は、私が飲み終えるまで、黙つて待つてくれた。

「美味しかったです。」

「でしょ？母の直伝なんだ。」

そう言つて、先生は笑つた。

「色々あつて、悩みが増えちゃつたみたいだね。」

私は、空になつたカップを握り締めた。

「最近の様子は、小次郎から聞いていたんだ。君自身も、大分小次郎を受け入れて、順調に回復していると思つていたんだよ。」

「はい。」

「此処に来てからだね？心の変化があつたのは、声も出なくなつていたと言つし、触る事も拒絶反応が出るつて？」

「情けないです。」

「そう思つちゃいけない。何か原因が有るんだ。話していらっしゃる？」

「聴様に…。」

「未遂だつたんだよね？君が、ペーパーナイフで首を傷つけたから。」

「…あの後、鏡で自分の姿を見たんです。」

「…血が流れる所？」

「…綺麗だと…思つてしましました。」

カップを持つ手に、涙が落する。

「こんなに…こんなに先輩に想つて頂いてるのに、まだ私は…。」

「確かに、さつき親父から逃げて、簪を喉に当てる時に思つたんだけどね。」

「…。」

「以前、寮での事件の時も、そつだつたよね？襲われた場合、普通

は刃物を相手に向ける。最初から自分に向ける、それは一種の自傷行為なんだよ。」

「！」

「其処までで無いとしても、君の場合は、明らかに他人の命より、自分の命を軽く見ている。違うかい？」

「…わかりません。」

「襲われた時、許せないのは相手では無く、襲われた自分…違う？」

「…」

「自分を許す…君にとつては難しいけどね。小次郎の愛する自分を、好きになれない？」

一気に耳まで赤くなる。

8月(4)

「少しづつでいいんだ。君自身を大切に思えたなら、その気持ちは消える。」

「はい。」

「でも、それだけじゃ無いよね？」

「えつ？」

「時間的に矛盾がある。喉の傷で病院から戻った時、君はまだそんなに激しい症状にはなっていなかつた。」

「先生は、何でもお見通しなんですね…。」

「何があつたんだい？」

私は、被りを振つた。

「言いたくありません。」

先生は、ため息をついた。

「其処が一番肝心な所なんだけどな…。」

「…。」

「参つたな…。」

「先輩は…お母様と似てるから、私を想つてくれるのでしょうか？」

「父に、全て聞いたんだね？」

頷ぐ、私。

「頼まれ事、された？」

「…。」

「そうか…。さつきの質問。正直、最初はそつだつたと思つよ。今は、違うだらうけどね。」

「…。」

「小次郎に、ちゃんと聞かないといけないよ。」

「いいんです。」

「言葉を尽くさないと、想いは伝わらない。」

「今私には、その勇気も資格も無い。」

「弱つてゐるね……相当……。」

「あの腕に戻れたら……今は、本当にそう思います……。」

「本当に、好きになつてくれたんだね。なのに、これじゃ悲し過ぎる。一体、何が君を追い詰めているんだ?」

「……いいんです、大丈夫。」

「神崎さん、君もしかして、小次郎から離れようと思つてゐる?」

「……。」

「薦められないよ。君自身がバラバラになつてしまふ!」

「辛いんです……私の事で悩む先輩を見るのは……。」

「離れたら、君はもつと辛くなる。」

「私は……。」

「大丈夫じゃない!本当に崩壊するぞ!」

「……。」

「いいかい?僕が相談に乗るから、絶対に短気は起こさない事!約束出来る?」

「……はい。」

「ござとなつたら、僕が力を貸すから。僕は、君の味方だ。いいね?」

「……はい。」

「……今日は、ゆつくり休みなさい。」

先生は、カップを受け取り、私を寝かせ、布団を掛けてくれた。

「先生……。」

「ん? 何だい?」

「ありがとう……。」

先生は、ベッドに座り、私の額にキスをして言つた。

「おやすみ、大事な妹……。」

そして、電気を消して出て行つた。

翌朝、務めて明るく挨拶をし、食事をとる。

先輩は、少し機嫌が悪い。

「今日は、どの様なご予定なんですか？」

「花を手向けて来ようと思つてね。折角此処まで来た事だし。」

「そうですか。」

「小次郎、お前も同行しなさい。」

「俺は…。」

そう言つて、先輩は私の方を見る。

「私、今日は物理の宿題やらなきや。」

「教えると、約束した。」

「まずは、自分で解かないと。帰つたら、教えて下さいね。それまで、自分で頑張ります。」

「…わかった。」

良かつた、渋々了解してくれた。

「そういうえば操ちゃん、お母さんのお墓参りは?」

先生に、いきなり『操ちゃん』と呼ばれ、私も面食らつたが、隣の先輩が硬直する。

「あ…うちは、お墓無いんです。代々散骨しているらしくて…。」

「操さんの家は、革新的なんだね。」

院長先生まで…。

「その方が、何処に居ても亡くなつた人を想つてあげられるって。私の母は、空に撒かれました。」

「そうか…そういう考え方もあるね。」

3人で川に向かう先輩達を見送る為に、玄関に出る。
出際に先輩が、スッと私の指先を握る。

私は、につこりと笑い

「行つてらつしゃい。」

と言つた。

先輩に大見得を切つたが、物理の宿題は遅々として進まなかつた。

「はあ～。」

思えば、まだ北海道に来て5日しか経つてないのに…色々あつて頭が一杯。

院長先生との約束…これを当面の課題にしよう。

でも、正面切つて言つても、先輩意固地になるだけだしな…。

「神崎様？」

マキさんが声を掛ける。

「は、はい！」

「お昼、何に致しましょ~?」

「皆さんは?」

「多分、外食です。」

「じゃあマキさんと2人?」

「ええ。」

「残り物でいいですよ。私も厨房に行きます。」

女2人で残り物を食べるつもりが、あまりに豪勢な残り物に思わず笑つてしまつた。

「神崎様は…。」

「それ、止めません?様つて柄じや無いんです、私。思い切り庶民だし。」

「じゃあ、神崎さん。小次郎坊ちやまの恋人なんですか?」

「いえいえ…後輩ですよ、後輩。」

「でも主人が、小次郎坊ちやまが神崎さんの事を嫁つて言つたって…。」

「だから…冗談ですつて!都賀さんにも、言つたのに…。」

「でも、坊ちやまが冗談なんてねえ。」

「言いません?」

「殆ど笑わないし、お話しあれないし…。」

「暗いですね…。」

「暗いというより、気難しい感じで…いつも、遠くを見ている様な方ですから。」

「…。」

「だから、今年は驚きました。お客様が沢山おみえになつた事も有りますが、あんなに笑つたり怒つたり、感情を露わにする坊ちやまを見るのは、初めてでした。」

「よく、喧嘩もするんですよ。」

「坊ちやまとですか？」

「お説教もされるし…。」

「はあ。」

「また、そのお説教がグチグチと長くて、嫌みたらしくて…。」

「誰の説教が、長くて嫌みたらしそう？」

「先輩！」

「坊ちやま！」

「全く、宿題放つたらかして、こんな所で油売つてたのか。然も、俺の悪口付きたあ、いい度胸だ。」

「地獄耳なんですよ、先輩は。」

マキさんは、クスクス笑いながら、お茶の用意を始めた。

「先生方は？」

「ああ、帰つた。今日の夜の便で、東京に戻るらしい。夕方前には、此処を出るそうだ。」

「そんなんに、早く？」

「明日から仕事だしな。」

「そつか…。」

厨房を片付け、マキさんと一緒にお茶を出す。

「宿題は、出来たかい？ 操ちゃん？」

「駄目です。お手上げ状態。明日から、先輩のスバルタ講義があると思います。」

「時間があつたら、僕が優しくじつくつ教えて上げるんだけどな。」

「私が教えてもいいぞ、操さん。」

「是非、お願ひしたいです！」

先輩と目が合う。

何も言わず、口を綻ばせ、私達の会話を聞いていたが、田が合ひつと、微笑みを返してくれた。

どうやら、親子3人で良い時間を過ごせた様だ。

楽しい時間の過ぎるのは早い。

あつという間に、先生方の出発の時間となつた。

「操ちゃん、昨日の約束、覚えているね？」

玄関に送るわたしの手を握り、先生が言った。

「はい、覚えています。」

「良い子だ。」

そう言つと、そつと抱き寄せて、また額にキスをして、ニヤツと笑つた。

「おっ、では、私も…。」

院長先生も、私を抱き締め、頬にキスをすると、「今度は、東京の家にも遊びにいらっしゃい。」

と、言つた。

「ええ、先輩と一緒に、是非伺います。」

お互いの心の内を伝え合つ。

2人が車で出発するのを見送ると、先輩が後ろから、「散歩に行かないか？ 神崎。」「と、誘いそのまま歩き出す。

私は、何も言わず、その後を着いていった。夕方の風は涼しく、秋の虫達が合唱している。先輩が振り返つて、手を差し出す。

怖ず怖ずと手を出す私を、引き寄せる。

「俺は、前の様にお前を抱き締める事にする。」「えつ？」

「お前が身を固くするなら、それが解けるまで抱き続ける。」「あ、あの…。」

「お前が俺を拒絶しない限り、俺の温もりで溶かしてやる。」「…先輩。」「…先輩。」

「…嫌か？」

「分からぬ…溶けなければ、辛い思いをしませんか？」

「信じろ、溶かしてみせる。」

「私には、自信が無い…。」

「俺を信じろ！」

そう言うと、私の身体を懷に抱く。
途端に固まり、小刻みに震える私。

「あ…。」

それでも、先輩は腕を緩めない。

「操…力を抜いて、楽にするんだ。」

足がガクガクして、立つていられない。

その場に座り込んで、先輩は包容を解かない。

「…操…操…。」

胸がチリチリする。

「ミサオ…愛してる…ミサオ…。」

「あ…。」

先輩からの初めての告白。

私の中の、何かが崩れる。

「愛してる…ミサオ…愛してる…。」

「…先輩。」

溶けた…本当に…。

力を失い、先輩の胸にしなだれ掛かる。

顎を引き上げられ、私の唇は先輩の唇で塞がれる。

私の舌が、先輩の舌に絡み取られる。

陶酔の時…頭がぼんやりする。

「ミサオ…。」

「駄目…先輩の魔法、効きすぎ…。」

「挑発されたからな。」

「え?」

「兄貴が挑発してきやがった…。」

あ…、あの玄関で…。

「で、その挑発に乗つたの？」

「怒つたか？」

「もう、知らないつ！」

腕の中で暴れる私に、先輩はもう一度キスをする。

甘く、とろける様なキス。

「一つわかつた事がある。」

「何？」

「屋外では、向かないという事だ。」

「どういう事？」

「お前が、こんなになるとは、予想外だつた。」

「なつ…！」

「これからは、部屋のベッドの上でだな。」

「絶対やだ！ もう絶対抱かせてなんてやらない…！」

「大きな声で…誰かに聞かれるぞ。」

と言つてクスクス笑う。

「もうこれつきりですからね…！」

そう、立ち上がりつて私はむくれた。

先輩も立ち上がりつて、土を払うと、

「そんな事、許す筈無いだろう？」

と言い、後ろから私の肩を抱きすべめた。

「お前は、もう俺の物なんだよ。」

しまつた…先輩がひだというのを忘れていた…。

遠くで、チリッと痛みが走つた。

翌日から、物理のスバルタ講義が行われ、どうにか私の宿題は大団円を迎えた。

「もう、クタクタです。しばらくは、頭使いたく無い。」

「まあ、よく頑張つたな。」

「疲れた。」

「神崎？」

「眠い。」

「全く。」

先輩は、私を抱き抱えて自分の部屋に運ぶ。

「やだ……此処……。」

「何故？」

「落ち着いて寝れないもん……。」

私は、本当に眠いのだ。

先輩の悪戯に付き合つ氣は無い。

「何もしねえよ。」

そつと、額にキスをして、一緒に添い寝する。
トロトロ……布団の中に、先輩の懷の中に溶けて行く。

何処かでバタンと風でドアの閉まる音がした。

その瞬間、

「グツ……！」

身体がのけぞり、硬直する。

「神崎？」

激しい痙攣、息が出来ない。

「操、落ち着いて、息をして……！」

浅い息を繰り返す私に、

「もつと深く、深く吸い込んで。そう、落ち着いて……俺が着いてる。」

「

そう諭す。

「この部屋……嫌……怖い……。」

「怖い？」

「怖いの……とても……。」

「わかった。」

「

先輩は、私を抱いて、違う部屋に移動してくれた。
程なく私の発作は治まり、静かな眠りに墮ちた。

「お前、あの部屋で何があった?」
先輩の呟きは、私には聞こえなかつた。

8月（5）

「甘いー。」

トウモロコシをかぶりつきながら、私は叫んだ。
都賀さんの知り合いの農家のトウモロコシ畑で、取れたてを蒸して頂く。

「沢山たべてね。」

農家の叔母さんが、冷たい麦茶を用意してくれた。

「美味しいか？」

私は、かぶりつきながら笑う。

「幸せそうな顔してるな。」

「幸せですか。」

「お手軽な奴…。」

「何とでも、どうでも。もう一本、貰っちゃお。」

先輩は、私の食べ終わったトウモロコシの芯をつまみ上げて、「好きだけあって、綺麗に食つもんだな…。」

と、感心する。

何か、ちょっと恥ずかしいかも…。

「どうした？」

「何でも無いです…。後は、キタキツネだけだつたんだけだなあ。」

「こればかりはなあ…。」

何度もキタキツネ・ウォッチングにもトライしたが、姿を見る事は出来なかつた。

「明日は、小樽でしたつけ？」

「ああ、明後日が函館で一泊。次の日の夕方に、カシオペアに乗る。」

「贅沢過ぎません?」

「知るか!親父のお膳立てだ。」

数日前、院長先生からチケットが送られて來た。

庶民の私には、贅沢過ぎる夢の様な時間だ。

「行きたい所、あるか？」

「ん…小樽つて、赤レンガ倉庫位しか知らない。」

「函館は？」

「一つ有りますけど…。」

「何処だ？」

「五稜郭。」

「また…渋い所を…。」

「好きなんですよ。」

「五稜郭がか？」

「…土方歳三。」

「…。」

あ、黙つた。

まさか、歴史上の人物にやきもちも無いだろ？」「…。

「先輩は、何処かあります？行きたい所。」

「そりだな…函館の夜景は、お前に見せてやりたいな。」

「綺麗なんですってね。」

「ああ。」

「お天気、晴れると良いですね。」

別荘に帰ると、私の部屋には大きな箱が沢山届いていた。

中には、女性用のワンピースやスーツ、カジュアルなドレスや靴、
バックまで…。

「これ…私に？」

「そうみたいだな。送り主は、兄貴だ。」

「どうしようつ…こんなに…。」

「貰つておけ、気紛れだろうからな。」

きっと、先生はご存知だったんだ。

バイトをするために寮を出た私は、TシャツにGパン、ちやんとし

た服は、面接用の制服しか持つて来て無かつた。

「シンデレラみたい。」

私は、洋服を抱き締めて言った。

「魔法が解けるのが、怖い…。」

「魔法じゃない…だから、安心しる。」

そう言って、指を絡ませる。

見上げた私の唇が塞がれ、そのままベッドに押し倒される。熱い包囲…やつと唇の自由が解かれて、私は言つた。

「駄目…それ以上は…。」

首筋に、耳朵にキスをされ、私の声は震える。ピクリと先輩の身体が固くなり、ハアというため息。

「もう少し…もう少しだけ、このままで…。」

私は、先輩の背中に手を回し、そつと抱き締めた。

富良野の駅まで都賀さんに送つて貰い、電車の時間を待つ。まだ、暫く掛かりそうだった。

「少し、此処で待つてろ。」

改札口のベンチに私を待たせ、先輩はフフリと出掛けてしまつた。30分も待つただろうか、そろそろ電車が到着する頃、先輩は荷物を持つて戻つて來た。

「待たせた、行くぞ。」

「はい。」

荷物を網棚に乗せる背中に、「何買つて来たんですか?」と、聞いた。

先輩は、紙袋を開き、

「お前の分だ。」

と大きな菓子箱を見せる。

「これは?」

「寮に帰ると、土産物の応酬だ。多分お前の所には、凄い数の土産物が届く。寮官室の受付に、自由に取れる様にして置いておくといい。」

「私の為に？あ、払います。」

「いい。」

「でも…。」

何も言わずに、もう一つの包みを渡す。

「何？」

「…。」

「開けてもいいですか？」

「ああ。」

箱を開けると、赤茶色の毛が見えた。

「あ…。」

引っ張り出すと、可愛いキタキツネのぬいぐるみが出てきた。

「可愛い！」

「…とうとう最後まで、見れなかつたからな。」

「ありがとう、先輩！」

私は、ぎゅっとキタキツネを抱き締める。

「上げとこうか？」

「つづん、抱いてます。」

「子供みたいだな。」

「子供ですもん！名前付けひやお。」

「何で？」

「…「ジジロー…で、夜一緒に寝るんだあ。」

頬をすり寄せて抱き締めた。

隣の先輩の耳が赤い…。

小樽の赤レンガ倉庫を歩き、私は北一硝子でグラスを買い、院長先生と先生に送った。

そんなに上等な物では無かつたが、今の私に出来る、精一杯のお礼だった。

「先輩も欲しい？」

「いや、いい。」

「お礼したいのに…。」

「…割れない物が良い。」

「そう?」

オルゴール館をまわり、付近を散策する。

日も落ちた街は、周囲もアベックばかりだ。

「こうやって歩いてたら、私達も恋人同士に見られたりしてね。」

何気ない言葉に、先輩は立ち止まる。

「お前…まだ自覚無いのか?」

「え?」

そのまま、空いているベンチに座らされる。

「俺達の関係は?」

「え…先輩、後輩…。」

「普通、その関係で抱き合つたり、キスしたりしないよな?」

「だつて…。」

「何故、認め様としない?」

先輩の語気が強くなる。

「…。」

「何が、お前を其処まで拒ませる?」

チリリツと胸が痛む。

「認めたら…戻れなくなる…。」

「戻る必要、有るのか?俺は、お前を離す気なんてねえぞ!」

「先の事なんて、誰にも分かりませんよ…。」

「ミサオ…。」

「今のはまじや駄目ですか?先輩、後輩のままじや…。」

「恋人という枠に填められるは、嫌だという事か?」

「…。」

「……わかつた。だがな……。」

先輩は、私を抱き締め、耳元で囁いた。

「俺の気持ちは、変わらねえ。今迄のスタイルも、変える気はねえからな……。」

そう言ひつと、私の唇を奪つた。

何時もと違つ……少し悲しいキス。

「『めんなさい』……。」

「謝るな。いづれお前に、恋人と言わせてみせんか。待つと決めたと言つたろう?..」

「……。」

川縁を、少し寒い風が吹いた。

翌日、函館に着き、五稜郭を散策した後、函館の街をそぞろ歩く。一軒の和装小物の店を見つけ、私は立ち止まつた。

「どうした?」

「先輩、私先輩にプレゼントしたい物があるの。してくれます?..」

「何だ?」

私は、先輩の髪に触れると、

「此處にね……組み紐結びませんか?」

「はあ?」

「駄目ですか?」

と、見上げた先輩の顔は、明らかに照れていた。

「別に……。」

「本当に……じゃあ、入りましょう!..」

私は、ウキウキと店の中に入る。

「いらっしゃいませ。」

上品な女将さんに、使用目的を伝え、組み紐の太さを選んでもらひつ。

「お色は、どうしましょつね?..」

「先輩、お好きな色有りますか?..」

「いや……お前が選んでくれ。」

「やつ?」

先輩に似つか… 100色は有りつかといふ組み紐を、私はじつくり吟味した。

「あ…これ…。」

淡い藤色の組み紐を手に取る。

上品で優しくて、それでいて高貴な色…。

「これにします。」

「お包みしましょうか?」

「いえ、着けていて貰います。」

先輩を座らせ、紐を結ぶ。

絹の組み紐は、キコッといふ音を立て、しつかりと締まつた。ああ、思つた通り、よく似合つ。

「まあ、男つぱりが一段と上がりましたねえ。」

「ええ、よく似合つ…。」

「そつか?」

と、鏡を見ていた先輩も、

「うん、悪く無いな…。」

と、言つてくれた。

店を出てからも、チラチラと上を見上げる私に、

「何だ?」

と、笑い掛ける。

「良く似合つてるな、と思つて。」

「惚れ直したか?」

「…もう!でも、そんな物で良かつたんですか?」

「ああ。贈られるなら、身に着ける物が良かつたしな。」

「…。」

「お前に縛らてるみたいで、いい気分だ。」

「なつ!外しましょう、やつぱり!」

あはははと笑う先輩… 実は、笑ひ気もあり?

函館の高級ホテルをチェックインした先輩が、私に耳打ちする。

「一人きりになるまで、一言も話すなよ。いいな？」

「どういう事？」

ベルボーイがやって来て、

「奥様、お荷物をお預かり致します。」

と、恭しく言つ。

「！」

「ああ、頼む。」

そう言つと、先輩は私の肩を抱き、エレベーターに誘導した。

「此方で」¹ぞいいます。」

と言われて通された部屋は、スイートルーム。

「…！」

「それでは、」¹ゆつくり寛ぎ²ぞトセー。」

と、ベルボーイが退出する。

「…ど、どういう事です！」

「ダブルブッキングで、この部屋しか空いて無い³そつだ。」

「だからって…。」

「流石にスイートルームだからな、フロントで妻つて記入した。」

「…。」

「鷹栖夫人、今日は、諦める。」

「えーっ…。」

「さあ、飯食つて、夜景見に行くぞ…。」

何か、上手くはぐらかされた。

「綺麗ですね…。」

空の星が地上に舞い降り、海岸線がくつきりと現れる。

函館の夜景は、他の何処の夜景とも違つ趣があつた。

「ああ、これを見せたかったんだ。」

「

「本当に、素敵…。」

山の空気は冷えて、思わず震える。

「戻るか？スイートルームに…。」

身体を固くする私。

「心配すんな。何もしねえよ。」

「本当に？」

「お前が望むなら、力の限りお相手するが？」

「知らない！」

「怒るな。今日は、北海道最後の夜だ。」

「そうですね…。」

「寮に帰ると、やつそつお前と一緒に居られなくなる。」

「…。」

後ろから腰を抱かれ、指を絡ませる。

「俺は、お前を北海道に連れてきて正解だったのか？」

「先輩？」

「お前に怖い思いをさせて、トラウマまで…。」

「…私は、幸せでしたよ。」この半月、とても…。」

「ミサオ…。」

「とも、嬉しかったんです。だから、そんな風に思わないで…。」

その夜、私は先輩に添い寝をしてもらい、穏やかな眠りに着いた。

10月（1）

10月末の文化祭が近付いて、学校内は何となく慌ただしい。私は、文化祭の実行委員として走り回っていた。

「神崎君！」

文化祭の資料を運ぶ私を、呼び止める声がする。

「南先輩。」

「大変そうだね、僕が持とう。生徒会室でいいのかな？」
「はい、ありがとうございます。」

資料を私の手から奪う。

南先輩は、以前剣道部でお世話になつた。

今は、文化祭実行委員長をされている。

「神崎君とは、ゆっくり話も出来ずについたからね。気になつていたんだよ。」

「ありがとうございます。」

「その後、手の調子はどうなんかい？」

「左手は、駄目ですね。小指と薬指の麻痺が取れません。」

「勿体ないね：いい腕だったのに。」

「もう、諦めましたから。」

「そうか。」

生徒会室の鍵を開けていると、大和先輩が通りかかる。

「よう、寮官さん。忙しそうだな。」

「大和先輩。」

「大和、久し振りだな。」

「おう。」

「あれ、お二人共、お知り合いなんですか？」

「そうだよ。大和とは、去年クラスメートだったからね。」

「そなんだ。」

じゃあ、先輩とも一緒だったのかな？

「寮官さん、仕事もう終わりか？図書室行くんだろ？」

「ええ、もう終わりです。」

「じゃあ、一緒に行こう。」

「あ…はい。」

珍しい、大和先輩が図書室？

同じ事を思ったのか、南先輩も聞く。

「お前が図書室とは、珍しいな。」

「図書室に行く目的は、本を読むばかりじゃ無いんだな。行くぞ、寮官さん。」

「は、はい。南先輩、ありがとうございます。」

私は、半ば引きずられる様に、生徒会室を後にした。

「大和先輩、南先輩と仲悪いんですか？」

「いや、別に…。」

「大和先輩にしては、珍しく棘があつたの、思い過げし？」

「寮官さん。」

「はい？」

「南と、あまり2人きりで会わない方がいい。」

「どうして？それに、此処暫くは難しいと思いますよ。南先輩、実行委員長だし。」

「小次郎には、南の事言わない方がいい。」

「どうして？仲悪いんですね？」

「まあな。」

「どうしよう…もう、言っちゃつてますよ、私…。」

図書室のドアを開けると、珠ちゃんが迎えてくれる。

「お疲れ様、操ちゃん。お茶如何？」

「ありがとう。喉カラカラ。」

「お待ちかねですよ。」

何時もの席で寝ている、ポニー・テール。

その髪には、あの日以来ずっと、淡い藤色の組み紐が結ばれている。

「先輩方も、お茶に致します？」

「おう。貰おう。」

「小次郎様？」

「…。」

「爆睡中？」

「拗ねてんだよ。起こしてやつてくれ、寮官さん。」

私は、先輩の隣の席に座り呼びかける。

「先輩？」

「…遅い。」

私が実行委員になつてから、先輩の機嫌が悪い。

帰る時間も遅くなつたりして、一緒に過ごす時間が少なくなつたのが原因だと思う。多分…。

「お茶、入りましたよ。」

机につづ伏せたまま、目だけ私を見上げると、皆に見えない様に私の手を握つた。

「行きましょう。」

「ああ。」

大和先輩と珠ちゃんの待つ、準備室に向かう。たわいも無い雑談の後、大和先輩が言った。

「小次郎、今年お前のクラス、出し物なんだ？」

「劇だとよ。」

「出るんですの？先輩！」

「いや、出ない。」

「俺、聞いたぞ。お前、今年もミスコンだつてな。」

「うるせえよ。」

「男子校なのに、ミスコンですの？」

「毎年恒例なんだつて。仮装してお化粧して、賞品だつて出るんだよ。クラスと個人に。」

「こいつ、去年バツクレたんだ。優勝候補だつたのによー！」

「そうですつてね。大丈夫、今年は逃がしません！」

先輩は、驚いた様に私の顔を見る。

「先輩のクラス役員さんに、頼まれたんですよ。先輩のヘヤメイクと「コーディネート、私がするの。」

そう言って、満面の笑みを返した。

「なんで…お前…。」

先輩の顔が、凍り付く。

「クラス役員同士で、話がついてるみたいですよ。」

「ああ、あの2人、お付き合いしていますものね。」

流石は珠ちゃん、情報通。

「という事で先輩、優勝目指して頑張りましょうねー。」

「…。」

先輩は、その場に果ててしまつた。

「寮官さん、楽しそうだな。」

「だって、先輩をいじめる機会つて、そつそつ有りませんから…。」

「確かに、そうだ！」

笑い声が起ころ。

「送つて行こう、神崎君。」

「南先輩。」

実行委員の仕事で遅くなつたある日、帰りつとした私は、声を掛けられた。

校内とはいえ、夜道は気持ち悪い。

ましてや、以前襲われた道を夜一人で歩きたく無い。

「ありがとうございます。」

「本当に君には、迷惑を掛けるね。」

「いえ、そんな事…。」

「ガサツな人間ばかりで、細かい事は、君に任せきりだ。」

「楽しいですよ、皆さんと一緒に一緒に出来るの…。」

「君は、本当に良い子だね。」

そう言われて、照れてしまう。

「神崎君は…誰か、お付き合ってしてゐる人、居るの?」

「…ああ、どうでしょ?」

「この質問が来た時、私は何時もこいつ答える。

「鷹栖と付き合つてるとこいつ噂があるけど…。」

「マズいよね、やつぱり噂になつてゐるんだ…。」

「僕が…立候補する余地は、有るだろ?」

「えつ?」

急な告白に、私は面食らつた。

「鷹栖が、君の事をストーカーしているところ噂もあるんだ。」「えつ? そんな噂!」

「それに彼の暴力で、君がロバを受けてるとこいつ噂もあるー。」「むちやくちやな…。」

南先輩は、話す程に興奮し、私の手を取り熱弁を振るひ。

「もし、君が困つてゐるなら、僕なら君を守つて上げらる。」

「いえ…私別に…。」

「いいんだ、君の苦しみは良く分かる。彼の様な乱暴者に纏わりつかれ、迷惑しているんだね?」「だから…。」

「僕が守つて上げるよ、神崎君!」

そう言つて、抱き付いて来る。

南先輩つて、思い込み激しいんだ…。」

「あの、南先輩…。」

私が言つたと、

「神崎…!」

よく知つた声が響くのは、同時だつた。

瞬間、南先輩は離れ、私を後ろに庇う。

「鷹栖…。」

「南、好き勝手言つてくれるのはやねえか。」「違つと言えるのか!」

「…神崎、帰るぞ!」

私は、先輩に腕を掴まれ、強引に引かれる。

「あ……はい……。」

背中に南先輩の声が響く。

「神崎君！――僕は君の味方だから――！僕なら君を守れる事を、忘れないで――！」

私は、ズンズン進む先輩に必死に着いて行く。

「先輩……痛い……。」

寮官室に入り、事務所を通り抜け、寝室に入ると、先輩はぐるりと振り向き私を抱き締める。

「……先輩……。」

「南の野郎、好き勝手言いやがつて――！」

私は、先輩の背中をさすりながら、

「落ち着いて下さい。」

と言った。

「お前が、実行委員なんかで遅くなるからだ……。」

「そうですね……。」

「お前が、南なんかに送つて貰つからだ……。」

「そうですね……。」

「お前が南なんかに、告白されるから……！」

そう言つと、唇を奪われる。

何時になく激しいキス。

先輩は、貪る様に私を求めた。

「……落ち着きました？」

「……。」

ようやく解放された時、先輩はバツが悪そうに、私を抱きしめたまま動かなかつた。

「迎えに来てくれたんでしょう？夜道が危ないから……。」

「……ああ。」

「ありがとう、先輩。」

ハアと息を吐き、私の顔をじつと見る。

「あんな噂、あるんですか？」

「…。」

「ストーカーとかDIVとか…。」

「…みたいだな。」

「酷い…否定しないの？」

「言いたい奴には、言わせておくわ。」

「私、嫌です。先輩が悪く言われるの…。」

「…」

「こんなに優しいのに…。」

「…。南の事だが…。」

「続けるのか？実行委員会。」

「続けますよ。後、一息だし。」

「お前…。」

「仕事は、仕事。最後迄キチンと果たします。」

「…。」

「私の事、信じられませんか？」

「いや…だが、先の事は分からないと、お前は言つた。」

「じゃあ、今を信じて…。」

「ミサオ…。」

「恋人なんて縛りが無くても、私の心は先輩の物なんですよ。」

文化祭当日。

私は先輩が逃げ出さない様に、朝からずっと監視している。

といつても、大和先輩や珠ちゃんと一緒に、校内を散策しているだけなんだけど。

昼過ぎ、寮官室には、私達4人と、9組のクラス役員が衣装を持つ

てやつて来ていた。

「…で、衣装は2パターんあるんだけど…鷹栖君、どつちが良いかな？」

消え入りそうな声…先輩、クラスでも怖がられてるんだ。
用意されたのは、ヒラヒラのレースやギャザー満載の「ゴスロリ服」と、
赤いサテン生地に金のドラゴンが付き、ものすごいスリットの入った
チャイナドレス。

「好きにしろ。」

「一体、何処から調達して来たんだ？しかも、男サイズじゃないか
！」

大和先輩も驚く。

「いや、その筋のルートがありまして…。」「
どんなルートだか…。」

取り付く島も無い先輩に、クラス役員さんは私に助け船を求める。
「ツンデレのゴスロリと、クールビューティーなチャイナ娘、どつ
ちがいい？」

「小次郎様なら…。」

「俺なら…。」

「クールビューティー！」

大和先輩と珠ちゃんの意見が一致する。

「という事で、チャイナドレスで良いですね、先輩？」

「ああ。」

「じゃあ、早速準備しましちうー！」

バタバタと用意し始める私。

それを傍観する面々。

「…てめえらー全員出て行きやがれ！」

先輩が爆発し、全員アタフタと退出する。

「あ…先輩、トランクスじゃ無いでしょ「うね？」

「なつ！」

「駄目ですよ、ブリーフか、無ければ競泳用の水着、着て来てください

そこ。スリットからトランクスなんか見えたなら、興醒めしちゃう。」

「…わかった。」

暫くして現れた先輩に、チャイナドレスを着せる。

「神崎、後ろ上げてくれ。」

後ろのファスナーを上げながら、服に付いているブラジャーを止める。

「胸の位置、良いですか？」

「苦しい…。」

「我慢して下さい。女性は、毎日苦しい思いしてるんです。」

「なあ、やけに張り切つてないか？」

「優勝狙つてますから！」

「それは、わからねえぞ。」

「優勝して貰わなきゃ困るんですけどー！」

「？」

私はヘヤアレンジに取り掛かる。

組み紐とゴムを外し、カーラーで前髪を巻く。

後ろは下ろして、左右に三つ編みを巻いて大きな渦巻きを作り上げた。

もみ上げには、適度な量の髪を下ろす。

「痛く有りません?」

「いや…上手いもんだな。」

先輩は感心する。

10月（2）

「さあ、メイクしますよ！」「

まず、付け爪を付ける。

そして、化粧水と乳液で肌を整える。

「何時も、お手入れとかしてるんですか？」

「冗談だろ？ 何もやっちゃいない。」

男の人には珍しい程の、色の白いきめ細かい肌。

「髪は？」

「朝、当たった。」

あまり濃く無いんだ…。

ベースで整えて、ファンデーションを塗る。

眉を引き、頬紅を入れる。

アイラインを長く引き、アイホールに薄い赤を目の際に濃い赤をさし、紫のシャドーを加えて色っぽく…。

ツケマツ毛どうしよう…元々長くて量のあるマツ毛…。

私は、軽くビューラーで上げると、マスカラを塗り、目尻のマツ毛を長く整えた。

「口、開けて。半開き。」

真っ赤なルージュを引き、グロスで熟れた様な唇を…。

思い付いて、目の際下に泣き黒子を入れてみた。

「終わりか？」

手の止まつた私を見て、先輩が問う。

「どうした？ お前、顔赤いぞ。」

「先輩…。」

「何だ？ どうかしたのか？」

「…奮いつきたくなる様な、美人です！…」

「ぐつ！」

廊下に待つ面々を迎え入れ、完成品を披露する。

部屋に広がる、どよめき。

9組のクラス役員さんは、優勝を確信したと喜ぶ。

「いい女だな、小次郎！俺と付き合え。」

「ぬかせ！馬鹿やうう…」

「耽美ですわね…中性的な魅力が、たまりませんわ！」

確かに、美人画と称する物も、これ程の美人には、そりやつお由に掛からない。

フンッ！と言いながら、姿見を見ていた先輩は、

「喜久子叔母の若い頃に似てるな…。」

と、言った。

そうか、私は知らず知らず喜久子様をイメージしてマイクしていたかもしだれない。

「じゃあ、時間になつたら、スタンバイお願ひします。」

「俺達も、会場で待つてからな！頑張れよ！」

そう言つて、皆は、出て行く。

「いのまま、逃げるか…。」

「駄目ですよ。」

「なあ、コレは？」

と、組み紐を私に渡す。

「今は、結びませんけど？」

「じゃあ、手首に巻いてくれ。」

私は、言われる儘に、手首に巻きはじめたが、解いて二の腕に長く巻いた。

「ずっと、付けて下さつてるんですね。」

「最近は、これを付けないと、落ち着かない。」

「打ち合わせ通り、お願いしますね。」

「やるのか？本当に…？」

先輩は、躊躇する。

「お願いですから、真面目にやって下さー。」

「何をそんなにムキになる？」

「…。」

「ミサオ？」

「（）褒美、上げるから…。」

「褒美？」

「私が持つてる物だつたら、何でも上げるからー。」

「…ミサオ…。」

「だからお願ひー優勝してー！」

私は、懇願した。

「…わかつた。最善を尽くせつ。」

「…そろそろ行きます？」

「そうだな。」

赤いパンプスを履き、大きな中華扇を持ち、頭から赤い大きなオーガンジーの布を被る。

私は、先輩の手を取り、会場控え室に入つた。

3年1組から順に発表するので、先輩の出番は一番最後。

私の方が、ドキドキしながら控え室を行き来していると、

「神崎君。」

と、呼ばれた。

「南先輩！ミスコン、参加してましたつけ？」

和装姿も艶やかな、これ又絶世の美女が其処にいた。

「いやあ、急遽交代して貰つたんだよ。」

「どうして…？」

「どうしても、優勝賞品が欲しくてね。」

と、につこり笑う。

「南先輩、それ職権乱用…。」

「優勝すれば、誰も文句は言わないと思つよ。」

「…失礼します。」

私は、先輩の所に戻つた。

「…南先輩が出てます…。」

「…そうか。心配するな。」

そう言つと、

「…燃えて來た！」

と言つた。

2年1組の出番、南先輩が舞台に上ると、

「ホウ」

という溜め息が、会場全体に溢れた。

扇を巧みに操り、紙吹雪を散らす。

その洗練された美しさに、会場がどよめいた。結果は、今迄に無い高得点。

マズイ…。

非常にマズイ…。

南先輩が、私の姿を見つけ、にっこりと笑う。

私は、先輩の所に飛んで行き、化粧直しを始める。

「落ち着いてますね、先輩。」

「こんなもんは、度胸だからな。」

「私、そろそろ客席に行つてます。」

「ああ。」

「…。」

「心配すんな。」

「はい。」

いよいよ先輩の出番。

曲に合わせ、赤いオーガンジーの布を被つたまま、舞台中央に進み出る。

ジャーンという銅鑼の音を合図に、布を取り客席に投げる。ワーッという歓声と共に、舞台をモンローウォークで歩き、ポーズを決め観客に流し目を送り、扇を広げ嫣然とした微笑みをたたえる。

綺麗…本当に色っぽい…ズルいよ先輩…。

その内に先輩は、パイプ椅子を持ち出し、色々悩ましいポーズを決めて、観客を挑発する。

先輩、そんなの予定に無い…。会場は、歓声で沸き返る。

最後の決めポーズでキスを投げる。

大きな歓声の中、先輩のステージは終わった。

得点は？

「満点だ！」

歓声が沸き上がった。

私の目に、涙が滲む。

表彰台で9組のクラス役員さんが、踊っていた。

コーディネーターが紹介され、私の名前が呼ばれる。

先輩が、舞台の上から手を差し伸べる。

私は舞台上上がり、先輩の隣に立つて皆の歓声に答えた。

「神崎、褒美を貰うぞ。」

「え？」

先輩は、いきなり私の後頭部を持つと、舞台中央でキスをした。

赤い唇が、私を捉える。

水を打つた様に、静まり返った会場。

たかだか3秒程の事だったと思つ。

次の瞬間、ワーッという歓声の中、私はしゃがみ込み、先輩はガツツポーズを決める。

ヒューヒューといつ歓声が、絶える事無く続いた。

「まだ、怒ってるのか？」

「当たり前です！あんな、公衆の面前で…。」

「もつと、激しいやつお見舞いしても、良かつたんだがな。」「知りません！」

私は、むくれる。

「だが、あれで寮官さんに対する手を出す者が減るだらうな。」

「あら、それはどうでしょ？』

と、珠ちゃんが笑う。

「どういう意味だ？」

「我が校の女性の人気で、操ちゃん上位にランキングされているの、ご存知ですか？」

「何それ…。」

「どちらかというと、クールなイメージですよ、操ちゃんは。ところが今日、新たな可愛らしい面を、公衆に曝してしまった。明日からのラブレターが楽しみですね。」

「燃やしちまえ、そんな物。」

「あら、小次郎様もまだ事じや無くなると思いますわ。」

「どういう事だ？」

「明日から、舞い込むファンレターの量、楽しみですわねー。」

「ところで、優勝賞品つてコレか？」

大和先輩が、包みをガサカザと開ける。

「それは…！」

中には、田覚まし時計が入っており、『優勝した貴方には、素晴らしい田覚めをプレゼントします。』と書いてあった。

「なんだ、田覚まし時計か。」

「あら、これ録音機能付きですわね。」

そう言って、珠ちゃんがボタンを押す。

「あ…駄目…。」

音楽が鳴り、メッセージが聞こえる。

『ダーリン、おはよー。まだ、起きないの？才寝坊さんね。私のキスで、起こしてあげるわ。チユッ。まだ、駄目なの？じゃあ、私も一緒にお布団に入つて、あ・げ・る』

「…。」

「…」これ、操ちゃんの声ですわよね？」「やめてえ。」

私は、耳を塞いでしゃがみ込む。

「こんな企画、よく通りましたね。」

「満場一致だつたのよ！トップシークレットで扱つてたの…。」

「良かつたですね…これが流出しなくて…。」

「ね、消しましょ？録音解除の機能も付いてるはず…。」

「…黙目だ。折角の優勝賞品だからな。」

「たが明日から、この悩ましい声で起きるのか？朝から刺激強すぎるぜ！」

そうだ、先輩と大和先輩は、同室…恥ずかしい。

「そろそろお化粧、落としましょうか？」

「ああ、頼む。」

「じゃあ、私達は、何処か散策にでも行きますか？大和先輩。」

「そうだな。」

そう言って、2人は出て行く。

髪を解き、化粧を落とし、着替えると、何時もの先輩が戻つて来た。姿見の前に座らせ、髪にブラシを掛ける。

「お前が、優勝にムキになつていた理由が、あれだつたんだな…。」

「あんなの…誰にも聞かせたく無かつたんです…。」

「消さないぞ…。」

「意地悪…」

「あんな声も、出せるんだな…。」

「止めて下さいよ…もう！」

髪を結い、組み紐を結ぶと、私は時計を見る。

「私、そろそろ仕事に戻らなきや。」

先輩が、肩越しに私の手を握る。

「優勝、おめでとう。先輩。」

私は、後ろから先輩の頬にキスをした。

文化祭も終わり、後片付けの為に走り回る私を、

「神崎君！」

と、南先輩が呼び止める。

「お疲れ様でした、南先輩。」

「ああ、お疲れ様。ちょっとといいかい？」

「はい。」

「鷹栖は、喜んでいた？例のアレ。」

「…。」

「あの後、鷹栖と話す機会があつてね。」

「えつ？」

「僕が、君を救つて見せると言つたら、彼『奪えるものなら、奪つてみるがいい！ アイツは俺の女だ！』って、自信たっぷりに言つんだよ。」

私は、顔に火がついた。

「それに、今日のキスだ。君は、恥ずかしがつたが、嫌がつてはいなかつた。」

「…済みません。」

「いいよ、君の気持ちはわかつたから。」

「あの…先輩は何も弁解しませんが、ストーカーとかD/Vとか、そんな事絶対にありませんから！」

「わかつた。」

「本当に、済みません。」

謝る私の頬にそつと手を添えて、

「彼は、幸せ者だよ。」

そう言って、南先輩は私の前から去つて行つた。

12月（1）

師走に入り、街に慌ただしさがと活気が漂つ。数日前、私の所に綺麗な封書がられて来た。

院長先生から、クリスマス・パー・ティー及び正月休暇のお誘い。

今回も、夏同様に全館閉鎖となってしまうので、私は早々に住み込みバイトを探していたのだが、バイトはあっても住む場所が無いという現実に打ちひしがれていた。

以前みたいに、ネットカフェという選択肢もあるが、先輩に見つかったら…。

寮つて、結構不便…もし、先輩が寮を出て自宅に戻つたら、私も寮を出て一人暮らししようかな…。

正月休暇は兎も角、クリスマス・パー・ティーには先輩と一緒に参加しよう。

家族だけのパー・ティーだと書いてあるし、院長先生との約束もある。あれから何度も先輩に話してみたけれど、今の所自宅に戻るつもりは無いと言つ。

以前よりは、良い親子関係を築きつつある先輩が帰らない理由…それは、私の存在だと思う。

やはり、先輩より先に寮を出るべきなんだ…私は色々思いを巡らせていた。

「寮を出るんですの！？」

「今すぐとは、行かないけどね…。進級するまではって、考えてるの。」

「小次郎様は、ご存知ですか？」

「絶対内緒だからね、珠ちゃん！前回みたいに連絡なんてしないでよ！」

「…わかりましたわ…でも、何故ですか？」

「休みの度に放り出されるのが、一番の理由かな…。」

「でも、それは小次郎様が…。」

「そんな、毎回迷惑掛けられないよ。」

「だつて、『ご家族公認の恋人なんでしょう?』」

「…先輩と私は…恋人じゃないよ。」

「え…?」

「先輩と後輩つて、関係…。」

「操ちやん?」

「…。」

「先輩は、『承認みなんですね?』」

「…うん。」

「恋人としての確証の無いまま、恋人同様にお付き合いされていた
と?」

「そうね…。」

「それって、蛇の生殺しじゃありません?」

「だから…何とかしないといけないと思つた。」

「…お別れするつもりですか?操ちやん。」

「…まだ…わからなし…。」

「嘘…心の奥で決めていらっしゃる…。」

「…適わないわね…。」

私は、寂しく笑った。

「約束したの…先輩のお父様と。先輩を実家に戻すつて。」

「それとこれは、別問題ですわ。」

「一緒に…。巡り巡つて、全て一本に繋がる。」

「頑なですわね。」

「そうね…そうじやないと、生きて来れなかつたもの…それ…。」

「それに?」

「住む世界が違います…。」

「そんな事!」

「学生の内は、良いのよ。でも、卒業したらそんな訳にはいかないもの…。」

「先の夢を見る前に…と、いう事ですか？」

「先輩の性格じや、すぐに切り替えるのは難しいと思ひ…。」

「��ちゃん、まさか学校も…。」

「一人暮らし出来れば、何処でも行ける訳だし…先輩の様子を見て判断するつもり。」

「��ちゃんの気持ちは？」

「…好きよ。ううん、愛してる。今は、自信を持つて言える。」

「小次郎様も、同じ気持ちですのに…。」

「私は、先輩とい家族に、幸せになつて欲しいの。色々考えたのよ、これでも。でも、どう考へても、其処に私が居ぢゃいけないのよ…。」

「小次郎様と、相談すべきですね。」

「先輩も理解しているの…きっとね。でも、心がそれを許さない。それが、若さ故の激情だとしてもね。」

「でも、そんな曖昧な事で…? 先の事を考えて、今の幸せを全て投げ出してしまうなんて！」

「…今現在、私と先輩が一緒に居る事で、悲しい想いをされている人が居るのよ…。」

「何ですって！どなたですか？」

「…先輩の…婚約者…。」

「…小次郎様、そんな方がいらしたんですね…?」

「…。」

「然も、お会いしたんですね？」

「…うん。」

珠ちゃんは、深い溜め息をついた。

「そういう事情なら、私が口を挟む問題ではありませんわね…。私としては、操ちゃんと小次郎様に幸せになつて頂きたいのですけれど…。」

「ありがとう、珠ちゃん。」

私の頬に、一筋涙が流れた。

「本当に、こんな物でいいんですか？」

「ああ、喜ぶと思うぞ。」

クリスマスの近付いた土曜日、クリスマスパーティーで渡すプレゼントを選ぶ為、私は先輩と街に来ていた。

「こんなの、何処にでも有るストラップですよ。」

「お前から、贈られる事に意義があるんだ。」

「そうですか？」

そう背中を押され、私はシルバーのストラップを2個、院長先生と先生の為に買った。

夕方、街を見下ろす陸橋で、私達は車のテールランプの行き過ぎるのを飽く事無く見ていた。

「先輩は、何がいい？」

「俺は…。」

突然私の背後に立ち、腰に手を回すと、私の耳の後ろにキスをする。

「あつ…。」

妙になまめかしい声を上げてしまい、先輩の腕に力が入る。

私自身が、先輩の事を好きだと確信し始めた頃から、私の身体は先輩の包容に微妙な反応を見せる事があった。

「…お前がいい…。」

無言で腕から逃れ様とする私を、優しくポンポンと叩きながら、

「…わかるてる。心配するな。…だがな…。」

再び、力一杯抱き締め肩に顔を埋めると。

「俺は、お前を強引に…泣かせてしまいたいと思つ事がある…。」
と、言つた。

先輩だつて、若い男性だ。

今迄、私をいたわり我慢して待つてくれた…しかし、それも限

界が来て居るのだろう…。

時間が無い…。

先輩の腕の上に、そつと手を重ねる。

「先輩、私ね…」

「ん?」

「クリスマスプレゼント、身に着ける物がいいな…高価な物じゃなくて、気軽に、ずっと長く着けられる物…。」

「わかった…。」

テールランプの列が、グニャリと歪む。

こぼれ落ちた涙は、先輩のコートの袖に吸い込まれた。

「本当に、ここには来ないのか?」

「だからあ、珠ちゃんと、ずっと前から約束してたんですよ。」

「…本当に?」

「疑い深いなあ。本人に、聞いてみて下さいよ。」

先輩は、何も言わずに、携帯でメールを打っている。
クリスマスパーティー当日、パーティーには出席するが、正月休暇は珠ちゃんと一緒に過ごすという事に、先輩は驚きの色を隠せない。珠ちゃんには、前もって口裏を合わせて貰っているが、先輩に面と向かつて嘘を突き通す自信が無いと、当日まで隠していたのだ。

「信用しました?」

「…ああ。」

先輩は、しぶしぶ返事をする。

本当は、夏同様に予定なんて無い。

パーティーが終わると、荷物を持ってネットカフェに直行し、不動産屋巡りをするつもりだった。

「今晩は、ご無沙汰致しております。」

「やあ、操さん。」

院長先生は、そう言って私をそっと包んでくれた。

「元気だつたかい？」

「はい…。」

「いらっしゃい、操ちゃん。」

「じ無沙汰致しております、先生。」

また、先生に包み込んで貰う。

私はこの先生には、私がしようとしている事、今後の先輩の事を、話しておかなければならぬと考えていた。

「今日は、お招き有り難う」ございます。あの、コレ恥ずかしいですが、お一人にクリスマスプレゼントです。」

「これは嬉しい、ありがとうございます。早速着けさせて貰うよ。」

「いやあ、素敵じゃないか…ありがとうございます。操ちゃん、準備を少し手伝ってくれるかい？」

「はい、喜んで。」

先生について

控え室に行く。

「どういう事だい、操ちゃん？」

先生へのプレゼントの袋に、メッセージを書いていたのだ。

「後で、お時間を作つて頂けますか？先輩には、内緒で…。」

「操ちゃん、まさか…。」

「…先生、何を運びましょ…？」

私は、質問には答えずに控え室を見回した。

「じゃあ、そのワインを運んでくれるかい？僕は、こいつのグラスを運ぶから。」

「わかりました。」

先生の後に着いて、ワインを運ぶ。

先生が、リビングに入った途端、誰かが違うドアからリビングに入つた気配がした。

女の人の話し声。

「小次郎っ！」

という、甘い声。

途端に、身体が震え硬直する。足がガクガクして、立っているのがやつとだ。

私の持っていたワイン瓶が落ちて、床を転がる。

「操ちゃん？」

先生が振り返り私の名を呼ぶのと、楓様が控え室を覗き込むのとは一緒だった。

楓様は、先生の前に進み控え室に入ると、後ろ手にドアを閉め鍵をかけた。

「…貴女。」

そう言いながら、私に近付いて平手打ちを放つ。

バランスを崩し座り込む私に、転がったワイン瓶を握り締め、滅多打ちに振り下ろした。

「何で、此処に居るのよー？私、言つたわよね！泥棒猫みたいな真似しないでって！小次郎は、私の物だつて、私の婚約者だつて！！！出て行つてよ！今すぐ此処からーー消えてよーー貴女なんか、消えちゃつてよーー！」

半狂乱で叫びながら、瓶が振り下ろされ、肩に背中に痺れる様な痛み…。

リビングからは、叫び声とドンドンというドアを叩く音…。

楓様が大きく瓶を振り上げると、鴨居に瓶が激しく当たり、頭の上で割れた。

白いワンピースを着た楓様の頭上から、赤ワインがスローモーションの様に降り注ぎ、真っ赤に染まつた楓様が叫び声を上げる。

割れた瓶を持つて、楓様が近付く。

「貴女が…悪いのよ…貴女が…。」

私に抱き付く彼女の怒りが、悲しみが流れ込み、私を満たし、差し込まれる。

頭からワインを被り、真っ赤に染まつた楓様を…血まみれの楓様を

見て、私は息が詰まつた。

ようやく蹴破られたドアから、人々が口々に控え室に飛び込む。

「楓！！」

「操！！」

「二人共！」

「小次郎！！小次郎つ！！」

先輩にすがりつく楓様が見える。

先生が私に駆け寄り、

「操ちゃん、大丈夫か！？」

と、助け起こしてくれた。

息が詰まり、意識が飛びそうな私は、先生に必死に伝えた。

「お願い…連れ…出し…て…。」

私を抱き上げる先生を見て、先輩は頷いた。

そして、私をじっと見詰める。

私達の視線が、絡み合つた。

涙が、目尻から流れた。

先輩…ありがとう…。

視線を切つたのは、私の方。

「お願…い…。」

先生は、混乱が続く控え室から脱出した。

先生は、私を2階に運ぼうとしたが、私は振りを振った。

「この家が、駄目なんだね？」

頷く私を見て、先生は、私を車に乗せて街に走り出す。車の中で、私はホッとして…そして意識が途切れた。

「…操ちゃん？」

名前を呼ばれ、意識が戻る。

「…先生…此処は？」

「安心しなさい、僕のマンションだ。それより、診察させてくれる

？」

「いえ、大丈夫です。」

「一方的に、暴力を受けていたと思うけど？」

「楓様の力位い、何て事ありません。其れよりも、楓様は？」

「しばらくしたら、落ち着いた様だ。何処にも怪我していないし……。」

「良かつた……。」

「君つて子は、全く……。」

先生は、溜め息をついた。

「楓とは、面識があつたよね?」

「……はい、夏に……。」

「もしかして、操ちゃんが言いたくないって言つてた事つて、今日楓が叫んでたアレ?」

「……。」

「あれは、喜久子叔母の所で勝手に言つている話だよ。まあ、今迄は、我が家も取り立て何も言つて来なかつたが、親父も僕も、小次郎の好きにさせて良いと考えているよ。」

「……でも、ご両家にとつて、最善なお話なのでしょう?」

「調べたのかい?まあ、合併話が無い訳では無いんだけど……。」

「それに……楓様は、先輩を深く愛しているらっしゃいます。」

「……操ちゃん。決心してしまつたのかい?」

「……。」

「言つたよね?操ちゃんが、崩壊してしまうかもしれない……。」

「私は、十分幸せでした。これから先も、その想いで生きていけます。それに……先輩も、もう限界なんです。」

「小次郎が?」

「私をいたわりながら、愛して下さいます。でも、それも限界に来ている……先輩の気持ちが離れたり、私に対しても悔されたりする方が、私には耐えられない……。」

「操ちゃん……。」

先生は、私の体を抱き寄せた。

その瞬間、

「操ちゃん、君やつぱり淫我してんね?」

「……。」

突然、先生の携帯が激しい音を立てる。

「こんな時に…。」

液晶画面には、病院の名前。

「病院から、呼び出しなんじや？」

「少し、気になる患者が居てね…。」

「私に構わず、行って下さい！」

「いや、君も行こう、操ちゃん。病院の方が、治療もしやすい。」

「…。」

先生は、有無を言わせず私を車に乗せた。

「先生…。」

「何だい？」

「先輩の事、見守つて下さい。」

「操ちゃん…。」

「自分勝手な我が儘で、先輩の事傷付ける、私を許して…。」

「…。」

車は病院に到着した。

先生は私の事を看護師さんに説明し、バタバタと患者の所へ駆けて行つた。

人の居ない夜中の病院に、看護師さんと、私の足音が響く。
看護師さんの携帯電話が鳴る。

「あの…私、1人で行けますから…。」

携帯に対応していた看護師さんは、

「本当に、大丈夫ですか？」

「はい、1人で行けます。」

「申し訳ありません、其方を曲がった所ですので、宜しくお願ひします。」

と言つて、走り去つた。

救急処置室に着いた私は、中で待たされていた。

軽い手術等も行われるみたいで、機材が所狭しと並んでいる。

何処かで事故でもあったのか、血まみれの男女が運ばれて着た。

女性は意識が有るらしく、男性に取り縋り絶叫を上げていた。

その姿、頭から血まみれの女性の姿に、楓様の姿を重ねる…頭から

血まみれで絶叫する楓様…。

恐ろしくて我が身を抱いた私は、妙な違和感に襲われ、自分の手のひらを見た。

血…血まみれになつた、私の手…私？…私が楓様を！？

私の思考は、停止してしまつた。

* * * * *

「済まない、小次郎…。」

自宅で待機していた俺は、兄貴の電話に色を無くした。
操が、姿を消した。

しかも、怪我をしていて治療もしないまま…。

「いいが、小次郎。落ち着いて聞けよ。彼女が処置室に居る時、かなり出血した患者が運び込まれて來た。その後、姿が消えたそうだ。彼女は、血を見たんだ。小次郎…。」

俺は、下唇を噛んで聞いていた。

「…彼女の消えた後、処置室からメスが1本消えていり…。心当たりを探せ、小次郎！俺も街の方を見てみる。」

「わかった…。」

「責めるなよ…彼女は、お前と俺達の為に、身を退く覚悟をしていたんだ。」

「どういう事だよつ…！」

「知っていたんだ。合併の話を…。それに、お前が限界に來てるのも、彼女は知っていた。」

「…！」

「いいが、絶対に死なせるなよ…！」

電話は、切れた。

どうしてお前が…お前ばかりが辛い思いをしなければいけない…いや、俺の弱さが招いた事だ。

「くそつたれ！！」

部屋を飛び出そうとした俺は、操の荷物を蹴って中身をぶちまけた。
慌てて片付ける中に『先輩へ』と書いた桐箱を見付ける。

「操…俺達は、やはり一緒に居る様に、運命づけられているんだ…。

俺は、自分の付けていた組み紐を解き、2本一緒に締め直し、部屋を飛び出た。

学校も寮も、完全閉鎖で入れない筈だ。

したじ 桐田の家はも御女は居なかつた

「小次郎様ごめんなさい。操ちゃんが今日私の家に来る予定で、嘘なんです。」

卷之三

「あいつ、正月の間、どうした？」

「不動産屋巡りをすると、言ひていました。操ちゃん、寮を出るお

「歴史小説」

「小次郎様の様子次第では、学校も転校するおつもりでしたの。」

... » בְּנֵי־עַמּוֹת וְבְנֵי־עַמּוֹת ...

『先輩の事、愛してる』って、おっしゃったんですよ!』

「死」。

「操ちゃんは、さーと小次郎様との思い出の場所にいらしゃいま
すわ！探して差し上げて下さー！」

「ああ。ありがとう、楠田。

電話は、切れた。

思い出の場所…。

彼女との生活は、殆どが学内だ。

行ってみるか…。

俺は、学校に向かった。

しかし、校門も裏門も、きつちり施錠されている。

この間、行つた店、歩道橋、インターネットカフェ…何処を回つても操は居ない。

大体、操の荷物は俺の家にある。

彼女は、財布どころか、コートすらこの寒空に着ていないのだ。

操が姿を消してから、もう直ぐ3時間。

焦りが募る。

「操…お前、何処に居るんだ？」

俺と初めて会つたのは、学校の寮。

いや、操は気付いて無かつた…お袋生き出しの操を見て、俺は心臓を驚撃にされた。

操の自覚があるのは、階段での事故だろ。たまたま真後ろを歩いていた俺を庇つて、階段の手すりを墜ちていった操。

俺は、お袋もお袋に似た操も、俺の身代わりに死んでしまったのかと、正直足がすくんだ。

酷い怪我と状況にもかかわらず、『大丈夫です』と乗り越えようとする操に、逞しさと寂しさを見たんだ。

こうやって一人で何でも耐えて生きてきたんだと、差し伸ばされる手はあつたのだろうかと…。

兄貴を呼んで病院に運ぶ前に、苦しい息の下、操は名前を教えてくれた。

あれから1ヶ月半、俺は操の名前を呼び続けた。

最初、意識がないのに涙を流し続けた。

時折、父親を呼んでいた。

それがいつのまにか、名前を呼ばれる毎に優しい表情を見せる様になつた。

俺は…眠り姫に恋をした。

操の腕のマッサージをし、名を呼び掛け、やつと目が覚めた時、操はもう俺の物だと勘違いしてたんだ。

兄貴から、左腕の状況を説明されたと聞いた時、俺は心配になつて病院中走り回つて探した。

雨の降る屋上のベンチで、操は一人声を上げて泣いていた。俺は、自分が一緒にいるから安心しようと、あの時言ひたかったんだ。だが、操から出た言葉は、『どちら様ですか?』だった。

俺は、すっかり意氣消沈して…。

「！」

もしかして、いや間違ひ無い！

俺は、兄貴に電話した。

「兄貴、今何処だ。」

「新宿駅だ。」

「多分、操は病院に居るんだ！」

「どういう事だ？」

「操は、俺と初めて会つたのは、病院の屋上だと思つてゐる。」「？」

「忘れたのか？操の記憶は、階段の事故で一度リセットされているんだよ！」

病院に走る俺の頭上から、フワフワと白い雪が舞つて來た。
操！－間に合つてくれ！

病院のロビーに入つた途端、

「小次郎！」

兄貴が、後ろから走つて來た。

「雪が酷くなつて來たぞ！」

「…居るはずなんだ…。」

俺達の顔に焦りが見えた。

もし、これで見つからなければ、この寒さだけでもタイムオーバーだろう。

操は、怪我をしている。

その上、自傷行為を起こしていたら…。

屋上の扉を開け、一目散にベンチに向かう。

夜景をシルエットに、浮かび上がる人影。

「操！…」

「操ちゃん！…」

ワイン色のアンサンブルの上には、雪が積もっていた。

「操！」

ベンチの雪の左側は、其処だけ深紅の薔薇を散らした様だ。
その動かぬ身体に、俺の足はすくんだ。

自分の身体が、雪と同じ温度まで下がつてゆく…。

兄貴は、すかさず脈と瞳孔を調べると、左腕をネクタイで縛った。

「ストレッチャーを持って来る！呼び��けろっ！小次郎！」

ハツと我に返り、

「操！…わかるか？俺だ！…操！…」

俺は、操の身体を抱き締めて、耳元で囁き続けた。

「ミサオ…ミサオ…戻つて来い。俺の所に、戻つて来い。俺がお前を守るから…それに、俺は、お前じやなきや駄目なんだ…ミサオ、愛してる…ミサオ…ミサオ…」

俺の頬に、熱い物が触れた。

顔を離すと、操の目から、涙が流れていった。

「ミサオ！…わかるか！…ミサオ！…」

只々涙を流し続ける操の唇に、俺は唇を重ねた。

柔らかいが、氷の様に冷たいその唇に、俺は悲しさと悔しさで一杯になり、涙が溢れた。

「ミサオ…目が覚めたら、結婚式を挙げよう。誰が何を言おうと構

わない！俺が、世界で一番幸せな花嫁にしてやるー!!サオ…愛して
る…だから、俺の所に帰つて来い！！!!サオ…愛して

「小次郎！用意出来たぞー！！」

「兄貴！…」

スタッフ数名と屋上に戻った兄貴は、操をストレッチャーに乗せる
と、走り出した。

俺も、後を追つて走る。

操が、俺の所に戻るのを信じて…。

春（1）

俺の名前は、鷹栖小次郎。

去年の春から、親父の病院でドクターとして働いている。
担当は、外科。

自分自身は心療内科を希望したが、俺の性格が災いした。
外科を志した兄貴とは、全くの逆パターンである。

夜勤明けに緊急手術をこなして、体力気力共にヘロヘロになりながら、俺は6階の特別室に向かう。

本来は、親族が入院した時用の部屋だが、今は通称『Mルーム』と呼ばれている。

扉を開けると、明るく柔らかい色彩の壁紙。

病室とは思えない広い部屋の中には、応接セットにダイニングテーブル、バストイレ付き、患者用のベッドの他に、付き添い用のベッドまで完備している。

まるでホテルの一室だ。

今俺は、普段此処で生活している。

「小次郎先生、お疲れ様です。」

「ああ。ご苦労様。」

看護師が2人、彼女を風呂に入れたのだろう。長い髪を拭いていた。

「後はいい。俺がやるから。」

「でも、お疲れじゃ無いですか？」

「いや、俺のリフレッシュなんだ。それに、長くなつたからな…コツがいるんだ。」

「じゃあ、お願ひします。」

看護師は、2人で出て行つた。

「ただいま、操。」

俺は、操の頬にキスをした。

彼女の髪は伸び続け、もつ踝の辺りまである。看護師達には手に余るだろうが、この髪を切る気はない。

「乾かそうか…。」

タオルで充分乾かし、ドライヤーの風を当てる。

「お前は、じゅうやつて乾かすのが好きだつたな…。」

風を当てて、指で梳ぐ。

光が通り抜け、キラキラと輝く。

あの時漆黒だった髪は、今は透き通る様な銀髪になっていた。

「助かるのか?」

「…小次郎、正直覚悟してくれ…。」

「…！」

「操ちやんの手首の傷、躊躇い傷が無かつたんだ。かなりの出血だつた。」

「…。」

「それに加えて、酷い打撲で内出血が酷くてな…ワイン瓶で滅多打ちされたみたいで、肋骨も2本折れてるそうだ。」

「そんな…。」

「それにな…。」

「まだ、あるのか!」

「楓のやつ、ガラスで操ちやんの事刺してるんだ。」

「…！」

「ワイン瓶のガラスが、刺したままにされていた。不幸中の幸いだつたのが抜かれていなかつた事だ。抜いていたら、今頃はもう…。」

「傷は?深さはどうなんだ?」

「かなり深い。肺には損傷は無いが、他の臓器は開けてみないと何とも…。」

「なんて事を…。」

「出血量が酷過ぎる。脳への影響も心配だ。ましてや操ちやんの場

合、精神的にも負担があるし……。」

「執刀は？」

「院長自ら執刀する。」

「親父が！？」

「それだけ、操ちゃんをお前の事を思つていてると言つ事だ。」

「…。」

「小次郎、そろそろいいんじやないか？帰つて来ないか？」

「…。」

「操ちゃんも、それを望んでいる。」

「…ああ、そうだな…。」

手術は成功し、操の命は繋がれた。

だが、それから9年、未だに目覚めない。

髪も手術後1年で、全て銀髪になつてしまつた。

髪を乾かすと、俺は操の髪を片側にまとめ、桜色の組み紐で結んでやる。

銀髪に薄い桜色が上品に映る。

あの日、俺が操に渡す筈だったクリスマスプレゼントだ。

「よく似合つ…あの日、俺達は同じ物を贈り合つつもりでいたんだな…。」

俺の髪には、今も淡い藤色と茄子紺の2本の組み紐が結わえてある。

手術が終わつて、HICOからこの部屋に操が移され、俺は初めてこの組み紐を操の髪に結んだ。

それをじつと見ていた親父は、突然喜久子叔母夫婦と楓をこの病室に呼び出した。

「何で事するんだ、親父！…俺は金輪際、楓なんかと会わねえぞ！」

「！」

「そんな訳にも行かないだろ？ いいから、この場は私に任せなさい。悪い様にはしないから。」

「…。」

しばらくしてやつて来た3人を、親父はにこやかに迎え入れた。3人は、ベッドに横たわる操に驚いたが、何も言わずにソファーに腰を下ろした。

「久し振りだね、篤郎君。其方は、どうだい？」

「ご無沙汰致しております、義兄さん。此方も何とか経営しています。」

「お兄様、私今週人間ドックに入りたいの。この部屋、開けて頂ける？」

俺は、立ち上がり叫びたい衝動に駆られた。

「それは、無理だ喜久子。人間ドックなら、自分の病院に入りなさい。」

「何ですって！？」

「そんな事を言えるのか？ 喜久子！ お前の娘があの子に何をしたか、わかっているのか？」

「でも、それはあの子が…。」

「黙りなさい！！ 楓！！」

反論する楓を、親父は一喝する。

「楓、お前が小次郎の事を思う気持ちはわかる。だが、お前も、小次郎の気持ちに気付いている筈だ…。」

「…。」

楓は、涙を浮かべて俯いた。

「でもお兄様、合併の話は？ 小次郎と楓の結婚あつての事でしきう？」

「私は、合併そのものを見送つても良いと考えている。息子を犠牲にするなら、尚更だ。」

「どこの馬の骨ともわからない娘の為に、どうしてそこまでするの？ 両家の結婚は、お互いの利害も含めて、最高の縁談のはずよ！」

喜久子叔母は、譲らない。

親父は、溜め息を吐くと静かに言った。

「楓は、無抵抗の彼女に、瓶で殴りつけ打撲と骨折を、さらにガラスで彼女を刺して全治3ヶ月の傷を負わした。立派な暴行傷害事件だよ。」

「でも…。」

「警察に届けるつもりは無い。だが、鷹栖の嫁には出来ない…！」

「くつ！」

「あんな子の為に…！」

「失礼な言葉は、控えてもらおつ。」

「！？」

「小次郎はたつた今、私の目の前で彼女と婚約したのだ。彼女は、正式な鷹栖の家の婚約者となる。」

「…！」

これには、俺も驚いた。

親父自ら、操を婚約者として公表したのだ。

「…義兄さん、宜しいのですか？ウチからの資金援助は、切つても構わないと？」

親父はニヤリと笑うと、

「構わないよ、篤郎君。只残念だが、その場合ウチからの派遣医師は、全員引き上げさせて頂く。医師会への便宜も、勿論出来なくななるが、構わないね？」

経営だけで、医師は鷹栖を頼り切っている篤郎叔父は、青くなつた。

「…義兄さん…ウチとしては、娘との結婚話が無くなつたとしても、此方と良い関係を続けて行きたいと考えています。今後共、ずっと…。」

「あなた！」

「黙りなさい、喜久子！…」

「正しい選択だと思うよ、篤郎君。」

そう言うと、親父は篤郎叔父と握手を交わす。

そして、

「喜久子、これ以上私を怒らせると、どうなるか分かつていいるな？
彼女は、私が認めた、鷹栖の嫁だ。内外で彼女の誹謗中傷など私の耳に入つた時には、鷹栖の全力を持つて受けて立つから、そのつもりでいる事だ。」

喜久子叔母は、青くなつて震えた。

「どうしても、鷹栖との絆が欲しいなら、稔を寄越しなさい。ただし、教育は、我が家で行う。」

「…わかりました。」

3人は、肩を落として帰つて言った。

俺は、親父の迫力と采配に只々驚いていた。

「…これでいいかな、小次郎？」

「…親父…良かつたのか？」

「何がだ？」

「合併の話…今迄進めて来たのに。」

親父は、優しい眼差しで俺見た。

「今迄お前が嫌がつていたのは、只漠然とだらう？だが、今回は、愛する相手がいての話だ。子供の幸せを、願わない親はいらないんだよ、小次郎。」

「…ありがとうございます、親父…。」

自分自身もシャワーを浴び、髪を乾かすと、操を自分のベッドに運び、腕枕をして添い寝する。

彼女の体勢を変える意味もあるのだが、俺にとつても至福の時だ。

「おやすみ、ミサオ…。」

唇を重ね、俺は深淵に落ちて行った。

何時もの夢…。

広大な花畠に、俺は座っている。
いつの間にか、近くに操が居る。

以前は、操を捕まえ様と、必死で追いかけた。

しかし、いつも悲しい笑みを浮かべ、するりと逃げてしまう。

最近は、此方が追わなければ、近くに留まる様になった。

「操、此処に来ないか？」

俺の隣をポンポンと叩いて、語りかける。

小首を傾げて聞いている操。

近付いて来た操に、たまらなくなり手を掴もつと伸ばした途端、ふわりと逃げて悲しい笑みを浮かべる。

「何故逃げる？」

振りを振る操。

「お前の不安に思う様な事は、もう何も無いんだ！」

操の頬に、涙が流れれる。

「戻つて来い、ミサオ…俺の所に…。愛してるんだ、ミサオ…。」
顔を覆つて涙する操に手を伸ばし、抱き締め様とすると、彼女の身体は霧散する。

最近はいつも此処で目が覚める。

俺は、目の前にある操の身体を抱き締めて、その温もりを確認する。

「…戻つて来い、ミサオ…愛してる…。」

「そうですの…やはり、逃げてしまわれのですね…。」

楠田は、操の手をさすりながら、俺の話を聞いていた。

夢の話など、誰にも話す気は無かつたが、ある日楠田に話すと、それは操からの何らかのメッセージなのではないかと言つ。

「私ね、小次郎様。夢の中で操ちゃんを捕まえる事が出来たら、現実にも戻つて来る様な気がしますのよ。」

「だと良いが…。」

「諦め無いで下さいね、小次郎様！」

「ああ……」

「小次郎様？」

「……俺も一緒に、あっちの世界に行けたらと、思う事がある……。」

「……小次郎様。」

「やはり、声が聞けないのは……辛いな……。」

「……。」

楠田は、涙を流した。

「……大和は、元気なのか？」

「相変わらずですわ。」

俺が寮を出て、大和と顔を合わせるのは図書室になった。
俺は、操の思い出のある図書室で、相変わらず寝ていた。
大和は、そんな俺を心配して顔を見に来た。
楠田は、そんな俺達に茶を入れ続けてくれた。
いつしか、大和と楠田が付き合い出し、未だに2人とは交流を持ち
続いている。

「今、海外か？」

「よくわかりませんの。あちこち行き過ぎて……気が向いたら連絡が
あります。でも、必ず帰つて来てくれますから。」

「……そうだな。」

「小次郎様の様に、常に側にいて下さると、女の子としては嬉しい
んですけどね……。」

「そうなのか？」

「あら、そうですわ！」

「操は、どうだったのか……大和からよく、もつと自由にしてやれと
言われてたんだ。あれじや息が詰まるとな……。」

「操ちゃんは、女の子にしては珍しいタイプだったかも……。でも、
常に見守つていて下さるのは、嬉しそうでしたわ。」

「……幼過ぎたんだ、俺が……操の方が大人で、俺はいつもなだめられ
ていた。」

「大人でしたわね……でも、可愛い所もあつて……。」

「頑固で、頑なで……優し過ぎた……。」

「小次郎様……。」

「……悪い、楠田。少し、出て来る。」

俺は、たまらなくなつて部屋を出た。

ドアの内側で、楠田の声が聞こえる。

「操ちゃん、小次郎様が泣いていらっしゃいます。早く、お戻りにならないと、小次郎様も倒れてしましますわ……。」

春(2)

今日も来ている…。

私は、此処で微睡んでいたいのに…。
とても甘く、優しく呼ばれる。

私は、あの人が好き…でも、あの人の所には行っちゃいけないの。
怖い事、悲しい事がたくさん、たくさん…。
もう、傷付くのは嫌、いや…。

でもあの人は、毎日やって来る。

以前は、私を追い回して、とても怖かった。

最近は、そんな事は無くなつたけれど、それでも近くに行くと、捕まえようとする。

とても、とても悲しい目をするの…胸が痛い…。

今日は、あの人の近くまで行つた。

あの人は座つていて、自分の隣に座らないかと誘つてゐるみたいだ
った。

もう少し近付いてもいいかしら?

そう思つてゐると、いきなり手を掴もうとする。
すんでのところで逃げる…。

あの人は、悲しい顔をして、何故と問ひ?
涙が…どうして、こんなに悲しいの?

あの人は、不安な事は無いと言つ。

私を愛してゐると言つ。

私に、戻つて來いと言つ。

胸が痛い…辛い…あの人の想いが流れ込む…。
いや、いや…。

あの人気が近寄つて來る…涙が溢れ…私は逃げ出した。

あの人側にいたいのに…。
あの人触れて欲しいのに…。どうして…。

今日もあの人はやつて來た。

でも、いつもみたいに呼んでくれない。

どうしたの？

そつと近付く。

あの人は、膝を抱えている。

具合が悪いの？

何かあったの？

そつと触れてみる。

あの人は、少し顔を上げて、何時もよりそつと私の手を掴み、顔の下に持つていく。

私の指先が濡れる…泣いてるの？

私はたまらなくなつて、あの人身体を包んだ。

あの人は顔を上げ、私の腰に手を回し、顔を押し付ける。

私は驚いて逃げようとするけれど、離して貰えない。

どうしよう…。

あの人的心が、震えているのがわかる。

淋しくて、淋しくて、どうしようもなく…自分も此方の世界に来ると言う。

それは駄目…私は振りを振つた。

あの人は、それじゃあ自分は、どうすればいいと問う。

お前の居ない世界は、もう耐えられないと言つ。

私は、こんなにも愛されている。

私の胸に、暖かい光がさした。

でも、まだ怖い…。

自然に身体が震える。

あの人は立ち上がり、私を抱き締めて言つた。

お前の事は、俺が支える。だから、俺の事はお前が支えてくれ。
そうやって、2人で共に歩いて行こう。

結婚しよう、ミサオ…。

愛してる…永遠に…ミサオ…。

私は、この人に名前を呼んで貰うのが好き…。
この人の、腕の中が好き…。

そして、甘い口付け…。

私は、彼の腕の中で溶けていった。

* * * * *

俺は、満ち足りた気分で目覚めた。

俺の腕のなかには、操が静かな寝息を立てていた。
やつと、夢の中の操を捕まえる事が出来た。

寝入る時は、最悪な気分だったが、寝起きは何時ものやるせない気
分ではなく、最高の気分だった。

思わず操を抱き締めてキスをする。

その時、

「…ん…。」

と反応があつた。

まさかっ!!

俺は、操を抱き抱え、必死に名前を呼びながら、携帯で兄貴を呼び
出した。

「君の名前は?」

「…//サオ…。」

「名字は、わかるかな?」

「彼女は、振りを振る。

「年齢は?」

「16歳。」

「学生かな?」

「多分...。」

「学校名は?」

「わかりません。」

「他に、覚えている事は?」

「頭の中に、靄が掛かったみたいで...。」

「名前は、どうしてわかつたのかな?」

「誰かに...ずっと呼ばれていたんです。ミサオ...って。」

「...そう。じゃあ、操ちゃんと呼んでいいかな?」

「はい。」

「僕は、操ちゃんの主治医の鷹栖武蔵です。」

「鷹栖...?」

「どうかした?」

「いえ...どこかで聞いた気がしたものですから...。」

「こつちは、同じく主治医の、鷹栖小次郎です。」

「...鷹栖 小次郎。」

「宜しく...。」

「...宜しく...お願いします。すみません、少し、疲れました。」

「そうだね。先ずは、体力を戻さないとね...。ゆっくり、お休み...。」

「俺は、操をベッドに寝かした。

「お休み...。」

「...お休みなさい。」

「記憶の混濁があるみたいだな。」

「戻るのか？」

「戻るだろう。お前の名前にも反応した。」

「そうか！」

「但し、焦りは禁物だ。時間が係るかもしねん。」

「わかつた。」

「しばらくは、触れ合う事は出来ないぞ。彼女に受け入れられるまで、じっくり待つんだ。」

「わかつてゐる。用覚めてくれて、話が出来る…それだけで、一生待てる気がする…。」

「ならいいんだがな…。」

兄貴は、微妙ないい方をして、部屋を出て行つた。

車椅子で廊下を行くと、すれ違う人や周囲の人の注目を浴びる。きっと、車椅子を押す小次郎先生が素敵なせいもあるけれど、原因は、きっと私の髪。

何故かわからないけど、若い癖にお婆さんの様に真っ白なんて、気持ち悪いに決まってる……。

「小次郎先生。」

「何だい？」

「髪、切つて貰えませんか？」

「どうして？」

「洗つたり、乾かしたりするの、看護士さん達だって手間だし……。」

「そんな事、気にする必要は無い。」

「でも、皆さん気持ち悪いに決まります。若いのにこんなに真っ白で、長くて……。皆さん見てるし……。」

小次郎先生は、車椅子の前に来てしゃがむと、私の髪を掴んで言った。

「誰が、気持ち悪いって？」

「だつて……。」

「神崎さん、皆が見るのは、この髪が美しくて羨ましいからだ。平気でそんな恥ずかしい事を言つ。

「どの位切らうと思つてた？」

「短くしようかなって……その方が目立たないし……。」

「じゃあ、一つ俺の願いを聞いてくれるか？」

「先生のお願い？」

「長いまでいて欲しい。洗うのも、乾かすのも協力するから。」

「長いのが好きなんですか？」

「ああ。俺の為に伸ばして貰えないか、神崎さん？」

「先生の為に……。」

「駄目かな？」

「…しようがないですね。お願ひされちゃあ…。でも、少しだけ切
らせて下さい。リハビリの時、自分の髪踏んじやう。」

「どの位？」

「せめて、小次郎先生位に…。」

「わかった。後で切るつ。」

今日は、屋上に行くといつ。

「あ…気持ちいい風…。」

屋上を吹き抜ける風が、気持ちいい。

そのまま屋上を進んで行く…あれ?ドキドキする…。
突き当たりを左に曲がって、ベンチが見えた所で、私は怖くなつて
車椅子の車輪を掴んだ。

途端に、指先が車椅子本体との間に挟まれてしまつ。

「つ痛!」

「済まん、大丈夫か!…?」

「あ…はい。」

「見せてみろ!」

おずおずと右手を出すると、指先から血の流れる指を、小次郎先生は
口に加えて血を吸い取る。
驚いて手を退こうとする私に、

「じつとしてる…。」

と、舐め続ける。

先生の舌の感覚が伝わり、またドキドキする。

「あの…もう、大丈夫ですから…。」

そう言つと、先生は自分のハンカチで指先を拭き、
「部屋に帰つたら、消毒して冷やそう。」

「はい…。」

「神崎さん…何故急に止めようとしたんだ?」

「…あそこは、何か嫌で…。」

「ベンチの所?」

「怖いの…胸が締め付けられる感じ…。」

「下りようか?」

「はい。」

部屋に帰ると、指先を消毒して、保冷剤で冷やす。

「気持ちいい…」

「良かった。」

「小次郎先生つて、私にフランクに接して下さりますよね?」

「そうかな?」

「なのに、何故神崎さんなの?」

「…。」

「武蔵先生も、院長先生も、名前で呼んで下さるの…、一番近くにいる小次郎先生は、神崎さんつて…。」

「…。」

「ごめんなさい。余計な事でした。」

少し寂しくなった。

「私、休みます。」

そう言つて、車椅子を移動してベッドに行く。
ベッドに上りうとしてバランスを崩した私を、小次郎先生が抱き留める。

「ごめんなさい…。」

「いや…。」

そのまま、小次郎先生は動かない。

「…先生?」

「…何と呼べばいい?」

「さつきの話?」

「ああ。」

「先生に、しつくつ来るのがいいな…。」

「操ちやん…。」

「何か違う。」

私は、クスクス笑った。

「操さん。」

「それも、何か変！」

「操つち？」

「なあに、それ！」

見上げて私が笑うと、少し腕に力を入れて言った。

「操…。」

「あ…。もう一度…。」

「操…。」

「…お願い、もう一度…。」

「…ミサオ…。」

私の足から力が抜け、先生に抱き抱えられる。

「先生、私の事そう呼んでたの？」

「何故？」

「ずっと昔から、そう呼ばれてた気がする…先生にそう呼ばれるのが好きよ。とても優しくて、少しちゃない…。」

「操で、いいのか？」

「そう呼んでくれると、嬉しいけど…駄目ですか？でも彼女に、怒られちゃうかな？」

「彼女？」

「いらっしゃるんでしょう？小次郎先生、素敵だし…。」

「今は、いないかな。」

「そうなの？じゃあ、呼んでくれます？」

「あ…。」

「嬉しいな…少し、疲れちゃった…。」

先生は、私に布団を掛けて、頬に手を添えて優しく言った。

「おやすみ、ミサオ…。」

翌日、珠ちゃんが遊びに来た。

珠ちゃんは、私の高校時代の友人で、彼女との会話で思い出した事は、数知れない。

「文化祭、覚えていらっしゃいます？操ちゃん！」

「おぼろげながらね…何か、役員してなかつた？」

「ええ、文化祭実行委員会に入つて、頑張つていらっしゃいましたわ。」

「色々、バタバタしてた記憶がある…。いつも、帰りに図書室に行つたわよね。」

「いつも、お茶を飲みましたわ…。」

「私と、珠ちゃんと、大和先輩と…もう1人…。」

「もう1人？」

「居たと思うの…誰？」

「それは、前も言つた通り、教えてはいけない決まりなんですよ。」

「でも、居たでしょ、う？」

「…。」

後ろで記録を取つていた小次郎先生が、ツイッヒと立つて別室に行く。

「文化祭の実行委員長の事は、覚えてます？」

「確か、剣道部の…南先輩！」

「そうそう！」

「確かに告白された様な…。」

「操ちゃん、おもてになりましたのよ。」

「何で、断つたんだつけ？」

「…。」

「私、誰か好きな人、居たのかも…。」

「ミスコン、覚えてます？」

「優勝したわよね！」

「そうですわ！」

「頑張ったのよ、目覚まし時計誰にも渡したくなくて…。」

「綺麗でしたわね。」

「腕によりを掛けたもの！へヤメイクして、チャイナドレス着せて、奮い着きたくなる程いい女に仕立てたわ！」

「誰を？」

「誰をつて、先輩…。」

「…操ちゃん。」

「先輩…先輩…。」

私は、急にガクガクと震え出した。

珠ちゃんが、小次郎先生を呼び、先生は直ぐに来てくれた。

「操、どうした？」

先生は、私を優しく抱き締めてくれる。

だが、私の震えは止まらない。

「珠ちゃん、私…。」

「何ですか？」

「とんでもない事、思い出して無いんじゃない！？」

「えつ…。」

「先輩つて誰？」

「それは…。」

「寮の話の時も、大和先輩と一緒に居た先輩。私が襲われた時に助けてくれた先輩。夏休みに行く宛てのない私を、別荘に連れて行ってくれた先輩。文化祭のミスコンで優勝した先輩。」

私は、小次郎先生の腕を強く掴んで、珠ちゃんに叫んでいた。

「みんな…同じ人よね？何時も、私の側に居てくれた人でしょ？何で？どうして、そんな大切な人の事、私思い出せずにいるの？どうして！！」

「落ち着け、操…落ち着くんだ…頼むから…ミサオ…ミサオ…。」

「…。」

私の意識は、真っ白になつて、途切れだ。

「もう一息ですわね、小次郎様。」

「ああ。でも、別に思い出さなくてもいいと思つてゐる……。」

「何故ですか？」

「辛い思い出が多過ぎるからな……だから、俺の記憶にブレークが掛かるんだ。」

「でも、思い出さなければ、一緒にになれませんでしょう？..」

「それは……。」

「小次郎様、リハビリが終わる迄に思い出さないと、操ちゃんは退院してしまいますのよ！もう学生では無く、大人の女性として、出て行つてしまりますのよー操ちゃんの性格は、ご存知でしょ？..」

「…。」

「諦めませんわよ、私は！辛い事もあるかもしだせませんけれど、操ちゃんと小次郎様に幸せになつて頂きたいですものー。」

「楠田……。済まない。諦めない……俺も……。」

珠ちゃんが帰つた翌日から、私は食欲も落ち、リハビリも休みがちになつた。

午前中は、小次郎先生も忙しく、私一人で過ごす事が多い。

「…先輩…先輩…。」

呼んでみる。

懐かしく、甘く、切ない響き…。

まるで、小次郎先生に操と呼ばれた様な…。

私、その人に操と呼ばれていたのかしら？
きつとそうだ…。

「一体誰なの？」

その時、ノックの音がした。

「入つていいかい、操ちゃん？」

武蔵先生が、顔を出す。

「勿論です。先生。」

「調子は、どうかな？」

「私ね、思い出せない人が居るんです。とても大切な人。」

「そういう人が居たという事を、思い出しただけでも快挙だよ。」

「でも、怖いの。」

「どうして？」

「その人思い出しても、もう9年も経っているのでしょうか…私は當時のままの感情や思いを抱いても、その人にとっては、とっくに過ぎの事だわ…。」

「操ちゃん…。」

「私の心がその人を思い出そうと、その人を求めてもがくの…でも、その人に拒否されるために？辛すぎるわ…。」

「きっと、待つててくれる…。信じて思いだすんだ…。」

武蔵先生は、そっと私を抱いて下さった。

あ…。

「…先生、操って、呼んでみて…。」

「操？」

「もつと…。」

「操…操…。」

「…ありがとうございます。」

私は、身を離すと、先生に聞いた。

「先生、退院は、いつ頃になりそう？」

「まだ、当分先だよ。リハビリもまだ進んで無いし…。」

「…転院、出来ますか？」

「…操ちゃん…まさか、君…！思い出したのかい？」

「先生…こんな結末…酷過ぎるわ…！」

「あいつは、ずっと待つてたんだ！」

「だったら、尚更酷過ぎる！目の前に、ずっと居たのよ！信じられない…！私、どれだけ先輩を傷付けて…嫌…嫌あ…もう、会えない

…先生お願い…どこか遠くに…！」

「操ちゃん、落ち着くんだ！操ちゃん…。」

奥軽井沢の別荘の一室、私はほとんど寝て過ごしている。
周りに殆ど住む人も居ない静かな所。

今日、最後のお手伝いさんが辞めて行つた。
こんな寂しい場所で、半病人と一緒に…たまらないだろう。
とりあえず、自分の事は何とか出来るだろう。
台所に降りて、冷蔵庫を開ける。

何も無いな…。

少し残っていたキャベツと人参で、スープを作つてみる。
これで2、3日持つかな…。
それにしたつて、食べるかどうか…。
窓の外の景色が、秋の装いに変化する。
少し寒い…窓の外を枯れ葉が舞つていた。

微睡むばかりの日々…。

今日は、何日かしら？

だるい…手足が重い…身体がベッドに沈み込む…。
意識が遠退く…。

暖かい…優しい温もり…。

きっと、天に召されたんだ…優しい包容…先輩の腕の中みたい…幸
せ…。

「ミサオ…ミサオ…。」

あ…声も聞こえる…。

「ミサオ…しつかりしろー…ミサオー…目を開けてくれー…ミサオー…。」

「……先輩？」

私は、深い溜め息をついた。

「お前、何だつてこんな事に…馬鹿野郎…！」

「…どうして…」。」

「兄貴が、連絡取らうとしても全く音信不通になつたって、心配してようやく打ち明けたんだ。家政婦は？歸りつけしたんだ？」

「…辞めたの…みんな。」

「何故、すぐ連絡しなかつた？」

「…大丈夫よ…。」

先輩は、私の腕に点滴を入れながら怒り続ける。

「お前、何日食事取つて無いんだ？」

「…下に…スープ…作つて…。」

「あんな物、とっくに腐つてたぞ！」

「…ああ…。」

「お前、また…。」

先輩は、私を無理やり起こすと、肩を掴み揺すつた。

「また、生きる事を諦めちまつのか！？また俺を置いて行くつてのか！？」

「…先輩…。」

「許さねえぞ…！操…！金輪際、俺は待つ気なんてねえからな…！」

骨が軋む程、抱き締められ、息が詰まる。

「お前が頼れるのは、俺しか居ないだろ？が…？何故素直に縋つてくれない？」

「…先輩…お父さん、やつぱりも…。」

先輩の身体に、緊張が走る。

「…そう…。」

涙が、流れる。

私は…天涯孤独になつてたんだ…薄々は、気付いていた。

私が目覚めてから、誰も父の話題を出さなかつたし、私の携帯が無くなつっていたから。

「…サオ…。」

「……いいの……わかつてたから……これで、もう……。」

「これで、もう何だつて言うんだ！？」

「……先輩……ちゃんと、話しましょ。」

「何を？」

「9年もの長い間、見守つてくれて、本当にありがとうございました。でも、この先は……。」

「どうだつて言うんだ？」

「別々の道を歩いて行つた方が……いいと思います。」

「何故？お前の気持ちは、もう俺からは離れたという事か？」

「もうじやない……でも、やっぱり先輩と私じや、住む世界が違い過ぎる。」

「そんな事……！」

「先輩……もう、子供じやないんです。私達……好きだという気持ちだけじや、前に進めない。違いますか？」

「お前……。」

「私、こうなる事わかつてたから、あの時別れる決心をしたのに、結局先輩に10年近く無駄な時間を過ぐさせてしまいました。本当に、申し訳ありません。」

「お前は、どうする？」

「私は、大丈夫つて言つたでしょ？思い出だけで、生きて行ける……。」

「嘘つけ……死んでも構わないって、思つてる癖に……。」

「……。」

「残念だが、その意見は却下だ。」

「どうして？先輩は、楓様と……。」

「楓の事を心配しているなら、無用だぞ。楓は、もう結婚した。」

「……そう。でも、他の縁談があるでしょ？」

「いや、無い。大体、俺には婚約者が居るからな。」

「そうだつたんですか……じゃあ、尚更じやないですか……。」

「ミサオ……お前、俺の気持ち考えた事あるか？」

「大丈夫…結婚して、家庭を持つて、子供が生まれて…。私の事なんか、只の思い出になります。」

「試してみるか…？」

そう言つと、先輩は私をベッドに押し倒した。

「なつ…！」

荒々しいキス。

私の自由を奪つて、胸のボタンを外す。

「やめて！先輩！！」

先輩は、こんな事しない！

こんなの先輩じゃ無い！！

「先輩が、後悔する様な事、しないで…。」

「…お前は、ずるいな。」

体を離しながら先輩は呟く。

「俺としては、一大決心だつたんだぞ…。」

「…婚約者の方に、申し訳ありません…。」

「その、婚約者だがなあ…。」

「…。」

「お前なんだぞ、ミサオ…。」

「…え？」

「9年前、親父が認めて、正式に発表したんだ。神崎操が、鷹栖の次男の正式な婚約者だとな…。」

「…。」

「勝手に決めた事、今迄黙つていた事、本当に済まない。」

私は、被りを振つた。

「ミサオ…。」

先輩は、私の髪を指で梳きながら、穏やかに話す。

「俺の気持ちは、今も昔も変わらない。ずっと、何があつても、お前だけを愛してる。鷹栖の家も、お前を受け入れている。後は…お前自身だ。」

先輩は、そつと私の頬を撫で、

「焦らなくていい。無理強いもしない。お前が、どうしても嫌なら、婚約を解消してやる。但し、俺は『口ネるぞ…』」

私は、少し笑つた。

「少し休め…何か、食べる物を調達して来る。」「はい…。」

その夜、私は先輩に添い寝してもらい、先輩の胸でたくさん泣いた。先輩は何も言わず、そっと背中を抱いてくれた。

「本当に、一緒に帰らないか?」

数日後、先輩は帰り支度をしながら聞いた。
「だつて、病院に戻るのも変だし…。」

「俺の家に来るといい。」

「えつ…でも…いや…それは…」

私は、耳返赤くなつて辞退した。

「私も、色々考えてみます。」

「駄目だ!お前は、考えるな!」

「どうして?」

「変な方向で考えられると、俺が困る。」「…。」

確かに、色々考えてしまうけど…。

「俺に任せろ。悪い様にはしないから…。」

「庶民感覺でお願いします。」

「奥様の、お気に召すまことに。」

「奥様じやないもの…。」

先輩は振り向いて、急に私を抱き寄せ、耳元で囁く。

「奥様にしてから、帰つても良いんだが…。」

そう言つと、首筋にキスをした。

「もう…しらない!」

アハハハと笑うと、

「週末にまた来る。」

そう言つて、先輩は帰つて行つた。

本当は、リハビリも済んでいないのだから、病院に戻るのがベストなんだろうけれど、先輩の立場もある。とはいっても、先輩の家なんて、とんでも無い。

1人暮らしするにも、全て先輩の手を煩わせ、金銭的負担まで…。1人になると、急に不安になる…。

私は、いつからこんな弱い人間になつたんだろう?…。何時も1人で生きて来たのに…。

「もしもし…。」

「操ちゃん?心配していたんだ。小次郎、そっちに行つただろう?..」

「先程、東京にお帰りになりました。」

「一緒に帰らなかつたのかい?」

私は、先輩との経緯を先生に話した。

「で、小次郎が帰つて、すぐに不安になつてしまつたのかい?」

「先生、私…。」

涙が、後から後から溢れ出る。

「操ちゃん、後ろ見てごらん?」

「えつ?」

振り向くと、先輩が部屋の入り口に、壁に背を預けて立つていた。

「…どうして?」

「兄貴に言われたんだ。きっと誰かさんは、俺が帰ると直ぐに不安になるから、もう一度迎えに行けつてな…。」

そう言うと、手を広げて

「…ミサオ!」

と呼ぶ。

私は、迷わずその腕に飛び込んだ。

「やつと…お前から飛び込んで来てくれたな…。」

そつ言つと、腕の中で愛を確かめ合つた。

「…ミサオ…欲しい…。」

「…先輩。」

「小次郎…だ。」

先輩は、自分の組み紐を解き、私の組み紐も解いた。

肌寒い空氣の中、先輩の触れた箇所が熱を持つてゆく。

やがて、上氣した私の肌に、先輩の幾分ひんやりした肌が絡みつき、

私の喘ぎ声だけが響く。

恥ずかしくて、声を殺そうと思わず自分の指を噛む。

先輩は、その手を外し、自分の指を絡めて握ると、耳元で囁く。

「10年待つんだ…もつと…聞かせろ…お前の鳴き声を…。」

耳を舌で舐られ、首筋を執拗に攻められ、私は腰を浮かせ一段と高い声を上げてしまつ。

「…ミサオ…ミサオ…。」

先輩は私を組み敷き、熱にうかされた様に私の名を呼び、そして、私の全てを征服した。

「明日、一緒に帰る。」

「…。」

「俺は、もう1日たりともお前を離す気は無いからな…。」

涙が溢れる。

「ミサオ?」

「…嬉しいの…幸せ過ぎて怖いの…。」

「…言つたまう?世界で一番幸せな花嫁にしてやると…。まだまだ、幸せの階段は、上り始めたばかりだ。」

軽井沢から戻つた私は、そのまま先輩の家に迎えられた。

「お帰り、操さん…。」

と言つて抱き締めて下さつた。

「院長先生…。」

私がそう言つと、

「もう、お義父さんと呼んで貰えるのだらう?」
と、先輩に聞く。

「ああ。」

先輩が、誇らしげに答えた。

それが何を意味するのか理解した私は、耳迄赤くなつて顔を覆つた。

「呼んでくれるね、操さん…?」

「…お義父様…。」

息が詰まる程抱き締められて、

「君には、何とお礼と謝罪をしなければならないんだらう…。苦労を掛けたね。私が、あんな事を頼んだばかりに…。」

私は、お義父様の胸の中で被りを振つた。

「幸せにおなり…君には、その権利がある。鷺栖の家が、君を幸せにすると信じているよ。」

「…ありがとうございます。」

「おい、親父! 何先にプロポーズしてんだよー俺だつて、まだしてないんだぞ!」

「何だ、まだしてないのか? お前は、肝心な所で、詰めが甘い…。
お義父様と先輩が言い合つてる中、私は先生と向き合つた。

「先生…。」

「あれ? 違う言い方有るんじゃない?」

「お義兄様…。本当に、ありがとうございます。」

ふわりと抱き締めて、額にキスをすると、

「綺麗になつたね…満ち足りて輝いているよ。こんなにいい女にな

るなら、僕が先に睡つけとけば良かつたな。」

と笑つて言い、身を離すと真剣な顔で、

「僕は、君の義兄であると同時に、一生君の主治医である事を忘れ
ないで。僕には、何でも話すんだよ。わかったね？」

「はい。」

「良い子だ…。」

そう言つて、また額にキスをする。

「だから、何で何度もキスしてんだよ！…」

私を引き離すと、先輩はお義兄様に食つて掛かる。

「まだまだ青いな、小次郎。操ちゃんの額は、義兄である僕の物だ

！」

「つ、なんだと！？」

「先輩、もうやめて…恥ずかしい…。」

「だから…。」

今度は、先輩が向き直る。

「先輩じゃ無いと言つたらう。」

「もづ、勘弁して下さい。今の私は、一杯一杯です…。」

すると、先輩は耳元で

「…後で、お仕置きだ…。」

と、囁く。

先輩…まだ、Sなんですね…。

「で、小次郎。結婚式は、いつ頃にするんだ？」

「もう、決めてるんだ…。」

「何時だい？」

「…クリスマス。」

「えつ？そんなに早く！？」

私の驚きを差し置いて、

「それは、良い！しかし、式場は、取れるかな？」

「大丈夫…予約してある。」

「えつ？何で？」

「…毎年予約してた。」

「…！」

「そりやあ、いい！」

「じゃあ、早速準備に取り掛かろうー後、2ヶ月無いぞー！」

それからには、あつという間の事だった。

式は鷹栖の氏神様で行われた。茄子紺の直衣姿の先輩は、今日はゆつたりと髪を結い、2本の組み紐を肩の下で結んである。

溜め息の出る程よく似合つ。

光源氏つて、こんな感じ？

私は、さしづめ末摘花かしり…。

見とれていると、田が合つてフワリと笑う。

「どうした？」

「良くお似合いだと思つて…。」

「…惚れ直した？」

「ええ。」

「今日は、素直だな。お前も、綺麗だ…良く似合つ。」

赤濃紫色の打衣姿の私は、髪をおすべらかしにして、下の方で薄桜色の組み紐で結わえてある。

「これを着せたかったんだ…。」

「だから、長い髪？」

「そうだな…もう少し長くても良かつたが…。」

「でも…黒ければ良かつたのに…。」

「俺は、漆黒の髪も好きだつたが、この銀髪も気に入つてゐんだがな…。」

「本当に？？」

「ああ。」

「先輩が気に入ってるなら、いいわ…。」

「ホラ、また…。」

「言いづらいんだもの…他の言い方じゃ駄目?..」

「どんな?」

「…貴方…とか…。」

「ん…。」

そつと顔を近付けると、

「2人きりの時に、名前で呼んでくれるなら…。」

そう言って微笑んだ。

「これはまた、美しい!..」

神主さんとお義父様が入つて來た。

「小次郎さんの美しさもさることながら、花嫁の美しさは、何ともかぐや姫の如くですな!..

「そうでしょう!ウチの嫁は、世界一です。」

そう言つて2人は笑う。

「私…?」

「だから、綺麗だと言つてるだろ?…自覚が無いってのもなあ…。」

先輩は、溜め息をつく。

私は、俯いて赤面してしまつた。

容姿を褒められた事なんて無いもの…。

「自信を持て…そうすれば、もつと美しくなる。」

顔が、上げられない。

「まあ、お前はそれはそれで可愛いんだがな…。」

「…もう、やめて…。」

「綺麗だよ、奥さん。」

私の親族は居ないから、鷹栖の親族と関係者、それに友人を招いての300人を超える大きな披露宴。

式直前、控え室に居る私達を、珠ちゃんと大和先輩が尋ねてくれた。

「お美しいですわ、お一人共…」

「そう? 恥ずかしくて…。」

シンプルで品のあるウエディングドレスは、後ろにダーツをたつふりと取ったクラシカルなデザイン。

「小次郎様のお見立てでしょ?」

「そうなの。わかる?」

「操ちやんの似合う物が、わかっていらっしゃる。流石ですわね。もう、全てお任せなのよ。」

「やりたいんですよ。ねえ、小次郎様。」

「まあな。」

「お前が、こんなマメな奴だつたとはな…。」

大和先輩が、冷やかす。

「あら、操ちやんとの結婚式だからですわよ。聞きましたわ、10年間ずっと武場予約していたんですよつてね?」

「…。」

「お前、そんなキャラだつたか?」

「つるせえ。」

「控え室も一緒なんて、本当に片時も離したく無いんですわね。」

「寮官さん、コイツがうつとおしくなつたら、何時でも言えよ。」

私は、笑いながら頷いた。

2人が出て行つた後、静かな時が流れる。

「予約つて…。」

「式場のか?」

「ええ。どうして、毎年クリスマスだつたんですか?」

先輩は、私の手を取り、

「…あの日から…やり直したかつたんだ…。」

やはりそうだつたんだ。

私が自分を抹殺しようとしたあの日…。

私は、彼の頭を抱き寄せる

「10年間、淋しいクリスマスを送らせてしましたね。今年か

らは、楽しいクリスマスにしましょうね、小次郎…。」「あ…。」

「私の腹に頭を擦り寄せながら、彼は言った。

「さあ奥さん。俺達の晴れ舞台に行こうか。」「ええ。貴方…。」

腕を組み部屋を出ようとする。

「あ…。」

「どうした?」「

「見て、雪…。」

「…あの日も、降つてたな…。」

窓辺に近付くと、一面真っ白に雪が降り積もっていた。「新しい雪が、淋しい思い出を全て覆い隠してくれるわ…。」

「新雪の上を、俺達は行くんだな。」

「そう…新雪が、ヴァージンロードになるの…。」

彼の顔が近付く。

「愛してる、ミサオ…。」

「小次郎…。」

私達は、新しい道を歩き始める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0126n/>

雪華遼遠

2010年10月10日18時54分発行